

# 月刊 PDF マガジン



# デジタル ビヘイビア

*digital behavior*

---

創刊準備号

**Vol.00**

'99/10-11

DTP で使う Yosemite 読本  
連載コラム デジタルの夜は明けた  
DTP-S ブロードキャスト

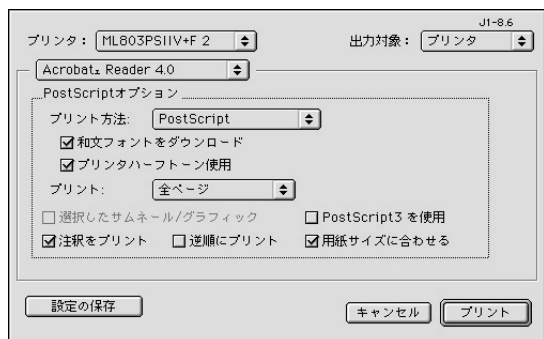
# 月刊PDFマガジン「デジタル ビヘイビア」の使い方

「デジタル ビヘイビア」はPDFで閲覧するマガジンですが、同時にプリンタで印刷することで、ペーパーマガジンにすることができます。

ドキュメントのサイズはA4で作成されていますが、プリンタドライバの機能を使って、袋とじで印刷して製本すれば、本としてアンプラグドの環境でお読みいただけます。

## ◎PostScriptプリンタの場合

PostScriptプリンタでは、LaserWriter8.6以降、AdobePS8.6をお使いください。印刷するにはAcrobat Reader 4.0もしくはAcrobat 4.0で開きます。まずプリンタダイアログで、アプリケーションのオプションを選択し、[プリント方法]で[PostScript]、そして[和文フォントをダウンロード]にチェックします。これで、レイアウトを維持したままプリントアウトできます。



次にオプションで[レイアウト]を選択し、ページ割り付けで[2ページ分]を選択し、枠線は[なし]にします。



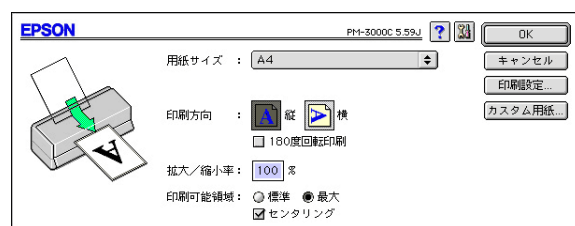
これで印刷すると、A4/1枚に2ページ分がレイアウトされますから、それらを袋とじして

背を綴じると、本になります。背の綴じ方は大型のホッチキスで平綴じするか、クリップなどで固定しましょう。

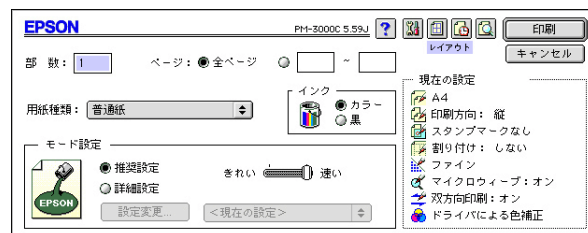
## ◎QuickDrawプリンタの場合

QuickDrawプリンタでもいくつかのプリンタでは、ページ割り付けが可能なプリンタがあります。ここではEPSON製のPM-3000Cで説明します。

まず用紙設定を開いて、印刷可能領域を[最大]、そして[センタリング]をチェックします。



次に印刷ダイアログを開き、レイアウトアイコンをクリックします。



ここで一番下の割り付けのページ数で[2ページ]を選択します。[枠は印刷]しません。



これでプリントすると、2ページが割り付けられて印刷されるので、それを袋とじして製本すると、「デジタル ビヘイビア」はA5サイズのペーパーマガジンになります。

# DTPで使う Yosemite誌本

## ■ハードウェア編

セカンドマシンからメインマシンへ (1999/08/17)

機能美を優先したデザイン (1999/08/20)

驚異の 100MHz のシステムバスクロック (1999/08/24)

高速で便利なモニタ環境 (1999/08/31)

低速インターフェースを統合する USB (1999/09/06)

USB でキーボードを共有する (1999/09/16)

やっぱり欲しい SCSI カード (1999/09/21)

100Base-TX の実力 (1999/09/29)

TCP/IP でパケットを送る (1999/10/07)

高速ホットプラグ FireWire (1999/10/18)

USB のハードディスクを使う (1999/10/29)

ATA の内蔵ハードディスクをセットする (1999/11/13)

# DTPで使う Yosemite 読本

## セカンドマシンから メインマシンへ

### 第1回

ロジックボード「Yosemite」を積んだ New G3。今までとは全く違ったデザインに戸惑わないという嘘になるが、機能を考えると Yosemite は素晴らしいマシンだろう。今までの Macintosh とどれくらい違うのかというと、やはり使ってみるしかない。使ってこそはじめて New G3 の真価の程がわかろうと言うものである。

先日とうとう New G3 を買ってしまった。もっともコストパフォーマンスに関心のあるわたしとしては、選択肢は一つしかない。いまのところ DVD-ROM が必要なわけではないし、CPU も 300MHz もあれば十分だからだ。

惜しむらくは、買ってから数日でアップルがメモリキャンペーンを始めたことだ。とはいえもう少し待てたかという、そういうわけではないので、まあこれは仕方ないだろう。PC100 規格の 64MB のメモリはストリート価格でせいぜい 1 万円程度<sup>(注)</sup>なので、納得するしかない。

New G3 については、DTP 関係ではあまり歓迎されていないような雰囲気があったが、最近は少しずつ導入は進んでいるようだ。もちろん新たに

Macintosh を買うとしても他に選択肢がない、ということもあるが、それだけでなく、やはりパフォーマンスが優れているということが認められてきたと考えてもいいのではないだろうか。

私が New G3 マシンを買ったのは、一つには、一台の Macintosh では仕事が間に合わないことがあるからである。いつもというわけではないが、忙しいときは、1 台では待ち時間が勿体ないことがある。特に DTP でファイルサイズの大きなプリントをしているときは、印刷で Macintosh が解放されるまで待たされる待ち時間が勿体ないのだ。待っている時間はメールをダウンロードしたり、Web にアクセスしたりもしたい。プリンタサーバにするかどうかは別にして、2 台同時に使える環境は必要なのだ。

もちろん、2 台目は Windows にするとか、中古のデスクトップ Macintosh に G3 カードを付けるとか、PowerBook にするという選択肢もあった。2 台目に Windows というのは多分ないけれど、PowerBook G3 という選択肢は、最近セミナーなどの機会が増えてきた私にとってかなり現実のものであ

り、大いに迷ったものである。

しかし、New G3 の機能を見ていると、やはり New G3 マシンを使いこなしていかなければ、DTP の未来はないかも知れない、と思うこともまた確かなのである。どこがどのくらい違うのか、ということを知るには自分で使ってみるしかあるまい。それに、値段だって、昔のことを考えると決して高くない。しかも中古の Macintosh にいろいろカードなどで増強しても、同じようなスペックを果たすことを考えると、新品を買っても金額的な差はほとんどない。それならば、新品を買ったほうがトータルの機能性は間違いなく優れているし、やはり新しい機能を試してみたいではないか。

というわけで、いくつかの問題点がないわけではないが、それらの解決方法を考えながら、Yosemite を使っていこうと思うわけである。多少の問題点があったとしても、それ以上の優れた機能があれば、おつりがあるわけで、そのあたりを知りたいのだ。特にひところ技術が停滞していたアップルが、いまここに来て技術的に業界をリードしつつあることを考えると、それを理解するには自分で使うということが是非とも必要なのである。

それと、いままでの Macintosh から、一気に New G3 に移行するというシナリオは現実的ではないと思う。おそらく旧型の Macintosh を使いながら、New G3 も使っていくというのが、DTP ではごく普通の使い方なのではあるまいか。DTP の生産性とマシンの価格を考えると、ひとりのデザイナーやオペレータが 2 台の Macintosh を使うと言うことは

決して贅沢なことではないだろう。今のモニタはたいがい 2 系統に入力ができるから、1 台のモニタに新旧 2 台 Macintosh をつなげば、デュアルマシンの環境はそれほど費用がかかるわけではない。

したがって当面はセカンドマシンとして使い、使い込んでいくうちに、メインのマシンに移行していくというシナリオが一番自然なのではあるまいか。そういう使い方をして、New G3 のメリットを活かす方法を考えいくのもいいのではないかと思う次第である。そのあたりを私なりにレポートしたい。

注 メモリのストリート価格は変動が著しい。当時の価格である。

# DTPで使うYosemite読本

## 機能を美を 優先したデザイン

### 第2回

Yosemite を搭載した Macintosh が歓迎されない一つに、あまりに斬新な外観がある。いままでのベージュの筐体、誰の目にもいかにも「コンピュータでござい」といわんばかりのデザインにおさらばし、まったく度肝を抜くようなデザインを果たした。

「ポリタンク」とか「ポリバケツ」と揶揄されることもある。たしかにエンボスがかかった半透明のアイスホワイト色を見ていると、そんなふうに見えないことはない。

しかしそれはやはり先入観ではないだろうか。デザイン的に受け入れられない気持ちがあるから、そう思うだけである。モニタの横におき、使ってみると、そのような印象は一切ない。特にサイドから見たときののシンメトリックなデザインは実に美しい。

New G3 を語るときに、表層的なデザインイメージだけで判断していいのだろうか。所詮人間の目は慣れるものであり、時間がたつと、今のデザインはきつと気にならなくなるに違いない。私も実はフロントパネルだけがクリアな素材で縦にストライプが入っているのは、どう

もしっくり来ないのだが、それ以外のデザインは「よく考えられているな」と思うことしきりである。

iMac は、コンシューマというよりコンピュータの初心者でも、簡単にしかも面倒な配線もしないでもすぐに使えるという明確なコンセプトから、プロダクトデザインが導きだされたのは承知のことだろう。同じように New G3 もプロシューマ向けにプロが Macintosh を使いこなすためにデザインを最優先されて設計されている。そういうことは所詮自分で使って見ないと分からないことが多いのだ。

まず四隅にある把手だが、これは実に機能的である。四隅に把手があることでフロント、バック、トップ、ボトムに強制的に空間が作られる。今までのデスクトップ型にしても、タワー型にしてもサイドとバックに放熱用のスリットがあるが、実際には Macintosh の左右にはさまざまなものが置かれており、CPU の放熱が設計どおりに行なわれる可能性はあまり多くない。たいていのユーザーは狭い空間の中に、Macintosh だけでなく周辺機器も詰め込んでおいていること



が多く、New G3 が四隅の把手によって確実に空気の通り道を確認できるのは大違いである。また下部にある二つの把手は、筐体を浮かすことで下置きしたときに、ほこりが進入することを防ぐに違いない。

上の二つの把手は、背面のポートにアクセスするとき威力を発揮する。上部の二つの把手を持つと軽々と筐体を持ち上げて、New G3 を前に引っ張りだすことができる。もちろん頻繁に背面の各種のポートにアクセスすることはあるわけではない。しかし、プロシューマたるもの、そういう必要性は決して低くない。新たにケーブルを差したり、ケーブルを差し替えたいと思ったとき（実はそういうことをするのが楽しいだけだったりするのだが）、いとも簡単に差し替えることができるわけで、たいへん便利である。

もっとも機能的なのは、側面のドアであろう。あればっかりは感動的である。ワンタッチで CPU もメモリも拡張カードも一望のもとに鳥瞰し、アクセスできるのだ。「オープンドア哲学」を標榜するのも頷ける。Macintosh も使いも慣れてくると、メモリやカード類の拡張は当たり前のことになるが、まるで電子レンジでチンするがごとく、Macintosh のパフォーマンスをいとも簡単に向上できる。

今までの Macintosh でも、昔から比べれば内部へのアクセスは簡単になってきたが、実際には必ずしもそうではない。何故なら、たいていのデスクトップタイプの Macintosh の上には MO ドライブや外付けハードディスクなどが積み上げられていて、まずそれらをどけないこと

には筐体のカバーを空けることはできないからである。タワー型であっても、実際にはケーブル類を全て外して、広い作業スペースを確保してからの増設になる。そのためカバーを空けるのは簡単になっても、それまでの手続きが面倒である。

しかし Yosemite では、筐体をちよいと前に引っ張りだして、開閉用のレバーに指をかけて軽く引っ張るだけでよい。しかもケーブル類は一切外す必要はないし、起動したままでもロジックボードにアクセス可能だ。

もちろん、背面のケーブルをいじったり、ロジックボードに手を入れるようなことは特別な事情がないかぎり、年に何回かあるだけかも知れない。しかしこれだけ簡単にアクセスできるとなると、その必要があったとき、なんのストレスもなく Macintosh を拡張することができるのだ。というより、ここまで簡単であれば、どんどん拡張して使いこなしていこうと思ってしまうのである。

表層的なデザインはともかく、機能性と言う意味では、New G3 は機能美がいかんなく果たされているのではないのではないかと思う。

# 驚異の100MHzの システムバスクロック

## 第3回

Yosemite のスピードを語るうえでもっと驚異的なのは、100MHz のシステムバスクロックだろう。まさかこんな早く 100MHz を達成するとは思わなかった。初代の Power Macintosh G3 が 83MHz だったから、十分予想できたとはいえ、足踏みすることなく一気に 100MHz の大台にのった。

Power Macintosh 8100 がリリースされたときに、CPU クロックは 80MHz を達成した。そのときのシステムクロックはその半分の 40MHz で、水晶発振器でクロックを倍にして CPU の速度を高速にした。それまでは CPU の速度とシステムバスの速度は同じで、Power Macintosh 以来、CPU の増幅は当たり前になった。当時その水晶発振器をクロックダブラーと呼んでいたが、いまは別の呼び方をしようである。

その後この発振器の倍率をあげて CPU のパフォーマンスを上げることが普通になり、CPU クロックはどんどんと高速になったが、システムバスのクロックはほとんど上がらなかった。私が使っている Power Macintosh 7600/120 も、システムバスクロックが 40MHz

を三倍にして CPU を 120MHz にしているか、システムクロックが 30MHz でそれを四倍にしているかのどちらかである（40MHz が正解）。

理屈の上からいうと、当然 CPU クロックが高いほうがいいのである。CPU では少なくとも OS やアプリケーションの演算命令を行ないながら、モニタの描画命令を行なっていて、複数のデバイスとデータのやり取りを行なうわけで、CPU の速度がシステムバスクロックの数倍であるのは、それほど不自然なことではない。

ただこのところアップルはシステムバスの高速化をおざなりにし、CPU クロックを上げることで、パフォーマンスの向上を図ってきたが、実はそれがもう限界に来ていたのである。

本当の意味での処理パフォーマンスを向上するためには、CPU クロックではなくシステムバスクロックを向上しなければならない。システムバスクロックを 50MHz のまま、CPU クロックを 400とか 500MHz にしても、実際にはそれほどパフォーマンスが上がるわけではなく、システムの処理が遅いと CPU が演



算待ちになって、クロックが上がったほど高速にならないのである。

つまりロジックボード全体でパフォーマンスを上げるためには、システムバスクロックと CPU クロック、そしてその間にあるキャッシュ（New G3 ではバックサイドキャッシュ）のバランスなのである。これらが調和されていてこそ、トータルのパフォーマンスは約束されるのだ（もちろん外部バスやビデオ回路のパフォーマンスとの調和も必要）。

しかし、しかしである。CPU やキャッシュメモリは、設計がしっかりしていて製造技術が確立できれば、処理パフォーマンスを進化させることはそれほど難しくない。いやいや難しくないわけではないが、ある意味では先が読みやすいものであることは間違いない。

ところが、システムバスクロックを上げるには、システムバスにぶら下がる全てのデバイスの信頼性を上げなければならないのだ。全てのパーツで 100MHz で動作しても問題ない設計と製造技術が問われるだけでなく、それを組み合わせたときの製造管理の技術まで高度なものにしなければならない。かつてアップルの製品で初期不良が多かったのは、こうした製造管理の技術が高くなかったため、それが故にシステムバスクロックは高くならなかったところが多分にある。

それがここに来て、着実にシステムバスクロックを大幅にアップさせてきた。これは、コンピュータ業界全体の製造技術が発展したことと、Macintosh と PC 互換機の技術的な壁が無くなりつつあることもあるにしても、アップルの製造技術が確かなものになったことの証なの

だ。

システムバスクロックが大幅に向上したということは大いに驚きであるが、それよりもロジックボードの設計にあたって、全体のパフォーマンスのバランスをもっともよく考慮しているところがもっとも「驚嘆」すべき点かも知れない。

いままでハードウェアの点で取り残されつつあった感のあるアップルだったが、100MHz のシステムバスクロックを見るにつけ、ハードウェアの点でも先頭を競う位置に付けつつある。このところはハードウェアのみならず、ソフトウェアも開発するハイブリッドな企業として、この二つを止揚しながら先進的な提案が可能になったと言うことだろう。100MHz のシステムバスクロックを見るだけでも、今後の急展開が大いに予想される。

# DTPで使うYosemite読本

## 高速で便利な モニタ環境

### 第4回

モニタでのウリは、33MHz から66MHz にアップされた ATI テクノロジー社の「RAGE 128GL」のグラフィックカードだろう。内蔵のビデオ回路はなくなり、モニタへの接続は全てグラフィックカード経由になる。

RAGE 128GL はクロックスピードを倍にするだけでなく、VRAM とグラフィック処理のチップと間も従来の倍の128 ビットでつないだ。これらによってモニタの処理をさらに高速化できるようになった。

最大で 1920 × 1080 ピクセルまで表示できるが、これは一般の 3 × 4 の比率ではないので、横長のモニタでしか使えない。実用性のあるのは 1280 × 960 ピクセルぐらいまでか。1600 × 1200 ピクセルでも 75MHz で表示できるが、やっぱり 19 インチのモニタでは、アイコンなどが小さくなり過ぎて少し辛い。

思いつきだが、もう少し解像度をアップして 2304 × 1740 ピクセルで表示して、OS がアイコンなどの QuickDraw 出力を 2 倍サイズに拡大できるようにしてくれると面白い。実質的

にリアル 144ppi の表示が可能になる。144ppi であれば、10 ポイント程度の文字でも十分フォントデザインが確実に認識できるだろう。また 144ppi で描画できれば、それ以外にも使い道はあるような気がする。

さてためしに使用しているモニタのサポートしていない解像度（というより未対応のリフレッシュレート、たとえば「推奨」されている 1600 × 1200 ピクセル/85MHz など）を指定すると、モニタへの信号が認識できなくなる。放って置くと変更前の解像度に戻るときもあるが、戻らないときはプログラマボタンを押して強制再起動するしかない。強制再起動すると、変更前の解像度で表示される。

また VRAM には SDRAM が 16MB 用意されている。最大解像度で 1670 万色表示しても約 6MB 程度の VRAM しか必要としないので、16MB もいらないのだが、その余った分は、3D のレンダリング時にテクスチャのマッピングなどで使用されるらしい。3D の処理を高速に行なうためにあつたほうがいいと言うことのようにだ。3D のレンダリングを

頻繁に行なうときには役に立つのだろう。また 3D のゲームなどでも威力を発揮するのだろうが、DTP ではほとんど関係ないだろう。また VRAM は増設できない。もっともその必要はないだろうが。

さてモニタを使ううえで便利になったのは、コネクタが DOS/V と共通のミニ D-SUB15 ピンになったことだろう。いままでは Macintosh 特有のピン（いまは Macintosh 特有になったが、昔の NEC の 98 の標準コネクタ）が二列の D-SUB15 ピンのコネクタで、これを接続するには、たいてい三列のミニ D-SUB15 ピンにのモニタケーブルに変換コネクタを接続して使うことが多かった。ミニ D-SUB15 ピン用のモニタケーブルは二千円から三千円位で売っているが、変換コネクタも同じくらいするので、Macintosh のモニタケーブルは高くつくことになる。しかし New G3 以降は DOS/V 用の汎用のモニタケーブルで済ませることが可能だ。

ついでながら、New G3 のパッケージの中には、従来のケーブルが使えるようにという配慮から、D-SUB15 ピンのコネクタをミニ D-SUB15 ピンに変換するコネクタがついている。これはアップル製の古いモニタを使っているときのための配慮だろう。アップル製でなくても古いモニタケーブルも変換すればよい。したがって買い替えでも今までのモニタケーブルはそのままでも使える。

もともと Macintosh 2 台を 1 台のモニタで接続して使うことにしていたので、ケーブルは別途買い求めなければならない。その点では、安価な汎用品を使

えるのは有難い。最初に使っている 7600/120 は SONY の Mutiscan19PS の D-SUB15 ピンの端子につながっているので、New G3 はもう一つの BNC 5 ピンに接続した。

Mutiscan19PS は切替スイッチが全面についているので、「INPUT」ボタンを押すだけで、7600 から G3/300 へ、またその逆も簡単に行なえる。これでモニタの共有は簡単にできた。次はキーボードの共有が課題だ。

# DTPで使うYosemite読本

## 低速インターフェース を統合する USB

### 第5回

Macintosh のデスクトップマシンで初めて USB ポートが付けられたのが、Yosemite を搭載する New G3 である。iMac によって、Macintosh ユーザーに認知され、周辺機器も増えるにつれ、市民権を着実に得てきている USB だが、DTP ではどのような使い方、価値があるのだろうか。

USB の基本的なものをざっと復習してみよう。USB は Universal Serial Bus のことで、インテルやマイクロソフトが提唱した規格である。つまり DOS/V をベースにした IBM/PC 互換機のインターフェースとして開発されたものである。一応この規格はオープンになっていて、使用料は不要であり、Macintosh にこれを搭載してもメリットこそあれ、デメリットはほんんどない。

もちろんメリットは、業界標準のインターフェースを使用することで、USB に接続するデバイスが安く販売されることであり、デメリットは、せいぜいいまの既存のデバイスからの乗り換えをどのようにするのか、あるいは乗り換えるメリットはどのようなことなのか、ということになるだろう。

仕様に関して言うと、Macintosh で使われていた低速のポート、ADB、プリンタ、モデムといったものを全て一元化できるということだ。高速モードで最大 12Mbps (1.5MB) 低速モードで 1.5Mbps で動作する。接続デバイスは、パソコン本体や USB ハブも含めて最大 127 台。そんなにつなぐことはまずないと思うが、一般の使用では接続数に制限はほとんどないと言ってよい。

余程高速でデータの転送を必要とするデバイス以外は、全て USB で対応できる。キーボード、マウス、プリンタ、モデムや TA、あるいはスキャナや MO ドライブやハードディスクといった大容量のデバイスも接続可能だ。もっとも大容量のデバイスは転送速度の制限は受けるから、高速でのデータ転送は望むべくもないが、Macintosh に標準で装備されている SCSI-1 につないだ MO ドライブに、データを書き込むとせいぜい 1 秒間に 300KB 程度の速度でしか書き込めないことを考えると、使い物にならないということはないだろう。

また電源も供給できるようになっていて、New G3 の USB ポートは

DC.5.0V の電源を供給するので、電源も持たないデバイスにも供給電源の範囲であれば接続可能だ。もちろんそれ以上は、デバイスもしくは USB ハブから電源を供給する必要がある。電源を持つハブを「セルフパワー型」と呼び、持たないものを「バスパワー型」と呼ぶ。

電源が十分に供給できないと USB デバイスは当然正しく動作しない。多くのデバイスを接続するときは、「セルフパワー型」のハブを使うべきだろう。またいまのところ USB デバイス同士でも相性があるようで、多くのデバイスを接続すると、うまくいかないこともあるようだ。

USB の規格上、ホスト（コンピュータ）側のプラグの形状は長方形の「A プラグ」、デバイス側は正方形の「B プラグ」になっている。ケーブルはデータ通信のツイストペア、電源供給、グラウンド用の 4 ピン。データはノイズ対策用にツイストペアになっていて、最大 6 m まで伸ばすことができるらしい。

しかし、USB の最大のメリットはホットプラグという点につけるのではないだろうか。抜き差し自由のインターフェースであるということが、USB を使うもっとも大きなメリットであるといえるのではないか。

これは一つのデバイスを USB を切り換えることで簡単に接続可能にするわけで、複数のパソコンに対して単数のデバイスを手間をかけることなく共有できるということだろう。

特に多様化するストレージに関しては、一つあれば何人もで共有できるという点ありがたい。DTP では移動用の

リムーバブルでは MO ディスクが標準になっていて、Macintosh 一台に MO 一台を装備しなければならないが、それ以外の使用頻度の低い ZIP やスーパーディスクなどは、何人かで共有すればよい。要するに必要なときだけ取り出してつなげばいいわけである。Macintosh のシステムにドライバだけインストールしておけばいいわけで、普段は箱の中に仕舞っておいても構わない。

いずれにしてもホットプラグ化された USB であれば、今後新たなデバイスが現れても、追加投資はそれほど気にはならないだろう。

また一つのデバイスを複数のパソコンで共有するときは、USB の切り換え器をつかえばよい。ホットプラグである以上、切り換えはスイッチ一つで簡単に行なえる。



# DTPで使うYosemite読本

## USBでキーボードを共有する

### 第6回

さて二台の Macintosh を一つのモニタで共有している私としては、当然キーボードも共有してスイッチ一つで簡単に切り換えたいと思うわけである。

古い Macintosh と新しい New G3 とでキーボードを共有する方法は二つある。一つはいままでどおりで ADB ポートを切り換えて接続するという方法で、この場合は ADB の切り換え器と ADB を接続したときシステムが認識できる機能拡張ファイルを用意すればよい。基本的にはキーボードは外した後もう一度つないでもうまく認識されず、反応が遅くなったりするので、結局再起動するしかなく、それを回避するためのユーティリティがいくつか出回っている。もっとも私は使っていない。

もう一つは、古い Macintosh の PCI バスに USB カードを拡張して、USB でキーボードを共有する方法である。この場合、ホットプラグであるため、キーボードが認識されないということはない。

いまのところ ADB で共有するという選択肢がもっとも間違いないのだが、せっかくの USB なので、キーボードの共

有を USB でやってみることにした。うまくいかないかも知れないが、試してみたくなったのである。

それで早速 USB のカードを買ってきて、7600/120 + Booster750 の PCI バスにつないでみた。あわせて USB の切り換え器も購入した。切り換え器は4ポートの切り換えできるものが5千円程度。USB カードは1万円前後である。キーボードは New G3 に付属するものを使う。

まだまだ安くない USB ケーブルが余計に必要となるが、接続は簡単に終わる。New G3 で入力してみる。問題なく動作する。当たり前か。次に 7600/120 に切り換える。まずモニタの全面の「INPUT」スイッチで 7600/120 がつなごうとした「HD15」の入力に切り換え、続いて USB 切り換え端子も同じく 7600/120 の USB カードにつながったポートに切り換える。おお、入力できるではないか。エディタで入力しても問題なく動作とするぞ。これは使えるかも知れない。

しかしそうは問屋が卸さなかった。残念ながら一部のキーが反応しないのだ。

New G3 の JIS キーボードで「む」とか「ろ」と印字されたキーがまったく入力を受けつけない。私はシフト JIS 時代のキーボードをしかもかな入力で使っている。「へ」とかが入力できなくなってしまう。やっぱり使えないのか。むむ、残念。

早速 USB カードを販売していたベンダーの URL を探し当て、質問のメールを送る。

「USB カードでキーボードを接続して使うと、一部のキーが反応しないのですが、これはどうしてでしょうか」

返事は間もなくかえってきた。「当社の USB カードはキーボードの配列の問題から、iMac や New G3 のキーボードには対応していません」と言うことだった。

ついでに厚かましくも同様の商品を発売している別のベンダーにも質問のメールを送った。ユーザーでないにも関わらず、すぐに返事がかえってきて、こちらは「USB のサポートにはアップルから供給された USB ドライバを使用していて、これは US 仕様のため、一部でない文字があるはず」とのことだった。ひよっとすると「New G3 にある USB のドライバをコピーして使えば回避できるかも」とあったが、New G3 のシステムにそれらしき USB のドライバを見つけることができなかった。

この問題は「Macintosh ニュース」でも触れられており、USB を使いながら、ADB ポートにもキーボードを接続していると、システムはキーを認識するはずとあったが、そうしていても、残念ながら、認識されないのである。

ちなみに 7600/120 は USB カードを使うため、Mac OS 8.5.1 にアップデートした。USB カードは 8.1 以降で対応しているのだが、手元に 8.1 はなかったため、この際だと思い、システムをアップデートした。

というわけで、USB キーボード共有作戦は、完全には成功したとはいえない。一応ほとんど使えるが、7600/120 で「へ」の文字入力だけは、隣においてある ADB キーボードから入力している。その場合だけ右手をひよいと伸ばさないといけませんが、それ以外は、その都度キーボードを入れ替える手間を考えると、当面のあいだと割り切って我慢して使うしかない。

いまのところ、ADB で切り換えする方法もあるが、いずれ USB での切り換えは普通になるに違いない。

これから、同時に扱う Macintosh の数が増えてきたとき、USB でのキーボード切り換えは楽になる。たとえば PowerBook 増やすときでも、USB のケーブルをつないで、切り換えるだけで、キーボードのポジションは変える必要はない。

おそらく日本製のキーボードに対応した USB のドライバがリリースされれば、古い Macintosh での入力トラブルは解決する問題だと思うので、それまではキーボードを USB での切り換えで行なうしかあるまい。

# DTPで使おうYosemite読本

## やっぱり欲しい SCSI カード

### 第7回

New G3 から SCSI が標準仕様から外された。SCSI が外された理由はいろいろあるにしても、最大の理由は、あまりに古びてしまった仕様にあると言わざるを得ない。まだまだ現役で使えるにしても、将来性を考えると、廃棄するしかないということだろう。

Macintosh の将来性を考えると、SCSI から FireWire に大容量データ転送の仕組みを置き換えていくためには、ドラスチックに SCSI 端子を廃棄するという、いわばデモンストレーション的な意思表示が必要になる。それほど SCSI インターフェースは浸透している。

DTP をするためにはいまのところ SCSI 端子は必要だ。従ってプリセットされていないなくても、使えるようにするしかない。むかしと違って Macintosh の SCSI カードも安くなったので、取りあえず SCSI カードを買ってきて取付ければよい。PCI バスに差し込むカードは、アダプテック・ジャパンやラトック・システムの安価な SCSI カードで十分だろう。

New G3 でも最速のマシンでは最初から SCSI カードがついているが、これ

は Ultra Wide 2 の規格なので通常の Ultra SCSI のデバイスは使えない。そのうえ最速マシンの Ultra Wide 2 SCSI は LHA の規格に則ったデバイスに限定されるうえ、LHA のデバイスはいまのところほとんどない。最速マシンにセットされた SCSI カードは DTP では実質的には役に立ちそうにない。

さて、SCSI カードがあればそれで済むのかというと、必ずしもそうではない。今販売されている SCSI カードの安価なものは、Ultra SCSI タイプのもので、これらはハードディスクや MO ドライブといった外部記憶装置ではほぼ問題なく使用できるが、一般のフラットベットタイプのスキャナでは、たいていが SCSI カードの拡張バスに対応していない。ラトック・システムの REX-PCI30P のカタログには、「TWAIN 対応のスキャナドライバが拡張バスに未対応のため」とあるが、低価格のフラットベットスキャナはたいていが「TWAIN 対応」であるため、まず使えないと考えられる。(ただし最近では SCSI-1 に対応した 25 ピンの端子を持つカードも販売されている)

そのため、いままでのスキヤナを使うためには、いままで標準で付属していた SCSI-1 のポートに接続するしかない。つまり旧型の Macintosh が必要ということになる。もっともスキヤナについては、New G3 であれば、USB 仕様のものを接続するという選択肢もある。ただしその場合は、USB スキヤナは旧型の Macintosh ではそのままでは使えない。

ちなみに、SCSI カードはもともと Power Macintosh 7600/120 に Ultra SCSI をセットして、ハードディスクだけでも高速にしようと思い、購入したものだ。7600 にはインターウェアの Booster750/233 が換装されていて、それに REX-PCI30P を差し込んだところ、ブートしなくなった。カーソルが左上に現れたときに止まってしまうのだ。

システムを読み込む前にブートが止まるので、ハードウェアの問題だと考えられる。REX-PCI30P と Booster750/233 がぶつかっているとしか考えられない。

しかし、インターウェアのページのサポート情報では、REX-PCI30P は Booster750/233 上で動作するとされているので、差し込み方に問題があるのか、別の要因が重なっているのかも知れない。念のため、ラトック・システムに送って見てもらったが、問題はないとのことだった。

というわけで、7600 ではうまく使えなかった REX-PCI30P だが、いまは New G3 にセットされ、そこから SCSI 機器に接続されている。いまのところ接続しているのは、CD-R のみだが、全く問題ない。またラトック・システムのペ

ージから、New G3 でブートできるようにするファームウェアをダウンロードし、ROM を書き換えた。

最終的には外部インターフェースは、USB や FireWire に置き変わっていくだろう。やはりホットプラグの便利さを体感すると、SCSI の規格の古さが身にしみる。しかし、当面の間いまある SCSI 機器を接続しないということは考えられない。New G3 を使う以上、SCSI カードの増設は仕方がないことだろう。



# DTPで使うYosemite読本

## 100Base-TX の実力

### 第8回

Yosemite になって Ethernet が初めて 100Base になった。Macintosh のネットワークは栄光のローカルトークを経て、10Base-2 から 10Base-T となり、iMac 以後やっと 100Base を達成した。

100Base といってもいくつか種類があり、大きく分けると HP が音頭をとって開発した 100VGA-AnyLan と 100Base-T がある。100VGA-AnyLan は 10Base との下位互換性を無視し、パフォーマンスを追及した規格だったが、登場時に高コストであったためほとんど普及しなかった。

結果的には、10Base と共存可能な 100Base-T が次世代がネットワークの仕様となった。100Base-T にはケーブルなどの仕様の違いによって 100Base-T2、T4、FX 等があるが、Yosemite に搭載されているのは最初に開発された 100Base-TX である。

さてはたして 100Base-TX になると、ネットワークのパフォーマンスは向上するのだろうか。

Yosemite の 100Base-TX の能力を完全に引き出すには幾つかの条件がある。まずは全二重通信で送受信すること、

である。

いままでの Ethernet は半二重という方式で通信を行ってきた。この方法は確実に手続きを踏んで行うので、安心かつ安全であるが、その分だけパフォーマンスは低下する。もともと Ethernet ではネットワーク上で同時に複数の送受信を行えない。したがってあるノードからパケットが送られると、他のノードはパケットの送受信が完了するまで待つことになる。しかも半二重の場合は、送信したら受信側が受けとったという確認のパケットを返信して、初めてひとつのパケットの送信が完了するのだ。

また複数のノードから同時にパケットが送出されると、コリジョンといってパケットの衝突が起こり、両方のパケットは破棄されてしまう。ネットワークでの通信頻度が高くなると、間違いなくコリジョンは増加する。したがって Ethernet で多くのコンピュータを繋いだ環境でネットワークのパフォーマンスが著しく低下してしまうのは、このコリジョンの頻度が高くなるからなのである。

こういったコリジョンによるパフォー



マンスの低下を避けるために開発された技術が全二重という方式である。基本的には全二重はコリジョンを発生させないようにする。簡単に言うと、ハブを賢くするのである。

以前のハブはシェアードハブと呼ばれるもので、いわば単なる信号の増幅器でしかない。送信された信号はハブで増幅されてネットワークに繋がった全てのノードに送られる。パケットには送信先アドレスが書かれているので、それを受信側が読んでパケットを受け取るのである。つまりハブは通過点にしかすぎない(だから安い)。

いま低価格で販売されているものはたいていがリピータハブと呼ばれているが、これはシェアードハブにバッファを積んだだけで、基本的な構造はほとんど変わらない。

そしてこのハブを賢くしたものが、スイッチングハブと呼ばれるハブである。スイッチングハブは、ハブ内のコントローラがパケットの送信先アドレスを読み、パケットを送信先だけに転送する。しかもハブ内の回路は各々のポートにバイパスできるようになっているので、送受信先が重ならないかぎり、複数の通信が可能になる。スイッチングハブの性能は、コントローラの性能と、バックプレーンと呼ばれるハブ全体の通信能力のキャパシティによって決められ

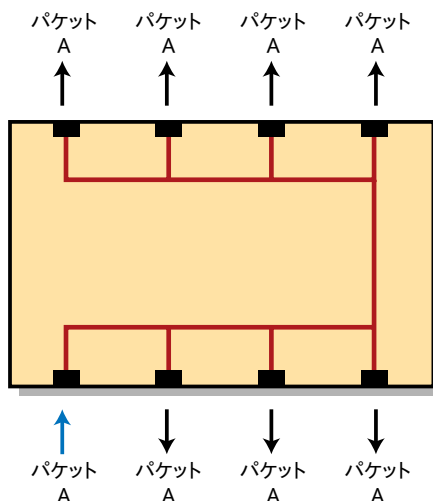
る。

そして全二重を使うためには、このスイッチングハブが不可欠になる。全二重でスイッチングハブを使ってネットワークを組めば、単純に言って半二重の倍のパフォーマンスが得られる。

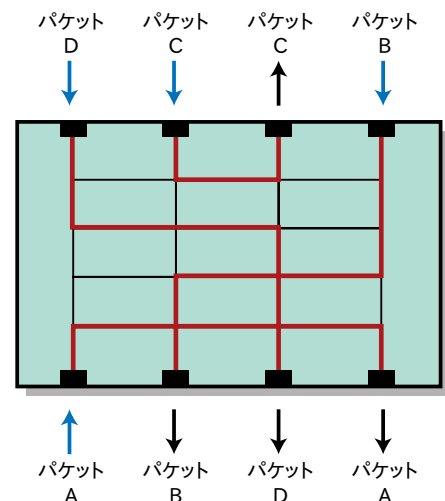
これは全二重では、スイッチングハブが受信ノードの代わりにパケットをどんどんと受け取るからである。しかもパケットを受け取って、律儀に受信確認をしてから次のパケットを受けるということはしない。全二重では送信と受信を同時に行えるので、パケットを連続して送り続けることができる。そのため実質的な送信パフォーマンスは半二重の倍といわれる。したがって全二重ではそのパフォーマンスを確実に生かせば、100Mbpsではなく200Mbpsの通信能力がある。つまり理論値では1秒間で25MBのデータを送ることが可能なのである。

とはいえ Yosemite 同士を全二重でネットワークしても、せいぜい1~2MB程度のパフォーマンスしか得られない。高速の通信を行うためには、まだ別の要因があるのである。

リピータハブの仕組み



スイッチングハブの仕組み



# DTPで使うTCP/IPで パケットを送る

## 第9回

Ethernet で全二重のパフォーマンスを最大限に発揮させるためには、ネットワークカードとスイッチングハブだけでは限界がある。ひとつはソフトウェアの問題であり、もう一つはハードウェアの問題である。

ソフトウェアの問題とは、ネットワークプロトコルの仕様にあるとってよい。簡単に言うと Macintosh のネットワークプロトコルは「遅い」の一言に尽きる。

ファイルサーバとして Macintosh をネットワークするソフトウェアは、セクタにある AppleShare という機能拡張書類である。これは AppleTalk のプロトコルを使って、ファイルサーバを提供する。

Macintosh の素晴らしさは、ファイルサーバというややこしい機能を「ファイル共有」という簡単な設定で手に入れられることだろう。一台の Macintosh を「ファイル共有」でサーバにしてやれば、ネットワークでつながった他の Macintosh から、共有指定したボリュームもしくはフォルダを開いてアクセスできる。

ただしこのファイルサーバの欠点は、サーバが落ちると、クライアントが即その影響をうけることだ。サーバがフリーズして、クライアントの動作が遅くなったり、フリーズしたりすることは珍しくない。

もともと AppleShare であっても、サーバマシンは別にして完全にサーバとしてのみ使えばほとんど問題がないが、現実にはサーバ兼クライアントとして使用することが多く、そのため余計にトラブルが発生する。

またネットワークにつながっている複数の Macintosh をサーバにしていると、ネットワークのパフォーマンスが著しく落ちる。これはサーバマシンがブロードキャストという信号を 30 秒おきにネットワークに送りだすことに起因する。サーバの存在を主張しネットワークにパケットが流れていないかどうかを調べるのである。これが一台の Macintosh からの信号であればまだしも、複数台になると、ブロードキャストの信号が頻繁にネットワークを占拠することになり、ネットワークの混雑が加速する。もし 10 台の Macintosh にサー

バの設定がなされていれば、単純にいつて3秒に一回ブロードキャストの信号が流れていることになり、このような AppleShare サーバによる混雑をブロードキャストストリームと呼ぶらしい。

従ってサーバのパフォーマンスを上げるためには、まず確実にサーバマシンを決め、そのマシンだけをサーバにするという設定が必要になる。そうすると、AppleShare であっても、多少のパフォーマンスは向上するはずだ。

もう一つの原因は、AppleShare で作られるパケットサイズが小さいということがある。最大値でどのくらいなのかは知らないが、Ethernet で動作する TCP/IP のパケットよりサイズがかなり小さいらしい。

もともとパケットには、通信されるデータ以外のものがだいたい 60KB 程度含まれている。そして TCP/IP では一つのパケットの最長サイズは 1500KB 程度だが、必ずしも最長サイズでパケットが作られるわけではない。最初は小さく、そしてネットワークがすいていると、だんだんと大きなパケットサイズになるのだ。もし一つのパケットで 1500KB のデータを転送できれば、実質的なデータの転送量はかなり大きくなるに違いないが、ネットワークが混雑していたり、ブロードキャストのような信号が割り込むと、またいちから小さな信号を送るらしい。AppleTalk ではもともとの最大サイズのパケットが小さいため、ネットワークがすいていても、あまり大きなパフォーマンスが得られないようである。

Ethernet のネットワークでデータの通信量を上げるためには、まず

AppleShare ではなく、TCP/IP のような高速のプロトコルを使用する。そしてサーバマシンを決めるということが必要になる。

Macintosh で TCP/IP でやり取りするためには、サーバに AppleShare IP というソフトウェアのインストールし、クライアントに AppleShare Client というソフトをインストールする。これで AppleShare IP の Web & File Server で TCP/IP をセットするだけである。

それ以外にもハードウェアの問題もある。つまり Macintosh のハードディスクの読み書きの速度にも影響される。SCSI-2 クラスの 1 秒間に実測値で 5 MB 程度でしか読み書きできないとなると、その半分も送ればよいほうだろう。いくらネットワークが高速になっても、Macintosh のハードディスクが遅かったり、パケットを作成処理する時間がかかると、当然通信パフォーマンスは下がることになる。

ちなみに New G3 に AppleShare IP をインストールし、7600/120 の 10Base-T のポートにつないで、クライアントからサーバからスイッチングハブ経由でデータを送ってみると、最大で 1 秒間に約 1.2MB でデータが転送された。10Base-T は多分半二重だから、10Mbps そのままのパフォーマンスが発揮されている。

実は 7600/120 に全二重の 100Base-TX 対応の PCI カードをいれてつないでみたが、相性が悪いようで、思いつき遅かったり、転送途中で止まったりする。一説によると、機能拡張の「Apple Enet」という拡張書類が、

Macintosh 純正のネットワークカードにのみ対応していて、その機能拡張が優先されるため、うまく働かないという。しかし「Apple Enet」を外して、サードパーティの Ethernet カードの機能拡張書類のみにしても、正しく動作できなかった。原因としては、7600 にセットした G3 カードと Ethernet カードがぶつかっている可能性もある。

それで Ethernet カードを別のメーカーのものに変えてみた。やはり Macintosh のイーサネットカードとしては定番の Farallon 製のものにした。つまり dit から販売されている「NET-G FastEther TX 10/100 PCI」にしたのである。

うまくいくかどうかはわからないが、古くから Macintosh 用のイーサネットカードを販売しているのだから、パフォーマンスは期待できるだろう。

作業は簡単で、カードを PCI バスに差し込み、ドライバユーティリティをインストールする。つぎに再起動し、コントロールパネルの AppleTalk で経由先を「NET-G FastEther TX 10/100」

にし、TCP/IP の設定もカードに切り換えるだけ。

以前のカードと違って、「NET-G FastEther TX 10/100」には「NET-G Setup」というユーティリティがついていて、これでカードの通信方法などを設定できる。ここで設定すると、100Base-TX 全二重に固定することができるらしい。

設定のダイアログのなかに「安全なキャッシュ設定」という項目があり、「Interware の G3 カードをご使用の場合」とある。ユーザーガイドを読むと、Interware の G3 カードでは PCI バスのデータ転送において、キャッシュの取り方が違っているため、ファイル転送が異常におそいという現象が発生することがあるらしい。

なるほど。最初のイーサネットカードがうまく動作しかなかったのは、キャッシュの方式によるものか。G3 カードを取付けると、もともと本体にセットされていたキャッシュを取り外すので、ひょっとするとそれとの関係だろうか。よくわからんが、「NET-G FastEther TX



「NET-G FastEther TX 10/100 PCI」をインストールすると、NET-G Setup というユーティリティも同時にインストールされる。これを使うと、Ethernet の転送モードを固定にできるほか、Interware の G3 カードのキャッシュ設定にも対応している。

10/100」は Interware の G3 カードに配慮してあるようだ。有難い。

というわけで、やっと 7600 と G3-300 を 100base-TX 全二重で接続することができた。ファイルの転送も問題なく行なわれる。

通信のパフォーマンスの方はどうだろうか。まず、7600 からサーバの G3-300 に転送するときは、約 35MB ほどの画像ファイルが 8 秒から 10 秒で転送される。1 秒間に 4MB 程度ということだ。これは素晴らしい。これだけあれば全く文句のいいようがない。

つぎに G3-300 から 7600 に転送してみる。最初はどうもいかなかったが、スイッチングハブがコリジョンを起こしていたので、ハブも含めて全ての電源を一旦きって、もう一度電源を入れると、こちらの方も予想どおりのパフォーマンスが達成された。

というわけで 100base-TX 全二重で AppleShare IP でのネットワークであれば、まず問題なくかなり高いパフォーマンスが得られるはずであり、ハードディスクやスイッチングハブの仕様にもよるものの、1 秒間に 5 MB 程度は通信可能のようだ。

1 秒間に 5 MB 転送できれば、間違いなく、Macintosh のみでファイルサーバは構築できるのである。



# DTPで使うYosemite読本

## 高速ホットプラグ FireWire

### 第 10 回

いままで SCSI 機器にならされていたものにとっては、FireWire (IEEE-1394 規格のアップルの商品名) は驚異の一言に尽きる。抜き差し自在の高速ストレージやドライバができれば、これほどありがたいことはない。

当初 DV 絡みの用途が取りざたされていたが、実際には、ハードディスクや MO ドライブ、CD-R などの既存の用途からのスライドは思いのほか早いようだ。

しかし考えてみると、この進歩の激しいコンピュータ業界で SCSI が生き延びてきた長い時間を振り返ると、よくがんばったなあ、と感じざるを得ない。が、やはりそろそろ高速データ転送規格の主役の座は降りるべきかもしれない。もちろん SCSI はまだまだ進化しそうだし、Windows でも SCSI はなくてもならないようになってきたが、それでもホットプラグの魅力にはかなわない。

それにしてもいままで何故、ホットプラグができなかったのだろうか。技術的には、もっと昔にできていてもよかつたはずではないか。いままでそういうことはできないと思込まされていた我々は

本来あるべき姿を知ったというべきだろう。

いまのところ低速は USB、高速は FireWire という具合に使い分けるとされているが、USB も高速化を図っていて、FireWire との競合もあるかもしれない。インテルを中心とする USB 推進派は、来年度中には 480Mbps の USB 2.0 の規格を商品化する予定で、これが FireWire のライバルになる。といってもどちらかに統一せず、棲み分けられる可能性がもっとも大きいかもしれない。いずれにしてもホットプラグは当然に仕様になっていくだろう。

Yosemite に付けられている FireWire は最大 400Mbps までをサポートする。正確には 100、200、400Mbps の三種類の転送速度をサポートしている。今後の仕様としては、800Mbps、1.6Gbps、3.2Gbps あたりまでが取りざたされているが、あくまで青写真にしか過ぎず、いつ頃にそういった高速の転送が実現できるかはまだまだ見えない。

しかし当初は 100Mbps 対応がほとんどだったのが、いまでは 400Mbps

のデバイスも登場している。こうして FireWire デバイスが普及していけば、高速化にむけた勢いはけっこう早いかも知れない。

さて 100Mbps は、単純に換算すると 1 秒間に 12.5MB の転送速度ということになる。400Mbps では 50MB になる。もちろんこれは理論値なので、実際のスピードはもっとも遅いはずだ。SCSI でも実際には理論値の半分もあればいいほうだから、FireWire も同じようなものだろう。

実際に発売されている FireWire のハードディスク（400Mbps に対応したものの）でも、ベンチマークテストでは、NewG3/350 の内蔵の IDE ハードディスクから、外付けの FireWire のハードディスクにデータを転送すると、1 秒間に約 3MB（1 ファイルの場合）といったところである。同じ仕様の作業を Ultra 2 SCSI（理論値 40MB/ps）ではほぼ倍の 6 MB になっているから、データ転送のパフォーマンスは思ったほどではない。もちろんこのテストでは内蔵のハードディスクを読み込む時間がかかっているの分だけ遅いため、FireWire ハードディスクの純粋なパフォーマンスではない。

しかし実質的には 400Mbps 対応であれば、UltraSCSI 程度のパフォーマンスはあると考えいいわけで、それでホットプラグの恩恵を受けることができるのであれば、FireWire の魅力はいやがおうでも増すに違いない。

FireWire は転送速度からいうと、ほぼ SCSI のパフォーマンスに追い付きつつあるといってもよい。価格的にも、

SCSI の外付けハードディスクと比較したときもうそれほど差は無くなっている。少なくともこれからは外付けハードディスクは確実に FireWire になるだろうし、MO ドライブや CD-R も着実に FireWire が主流になっていくに違いない。

ただしこれだけは、実際に使ってみてホットプラグの便利さを体験しないことには理解できないものかもしれない。いままで馴染んだ SCSI に飼い慣らされた私たちのビヘイビアはすぐさま変わるわけではないが、それでも一度使えば、SCSI に戻れないこともまた確かなのである。

FireWire の可能性は、まだもうひとつある。それは FireWire をネットワークとして使うことである。現在 IP over IEEE1394 というインターネットプロトコルで通信する規格が進んでいる。その場合、400Mbps で一つの packetsize が 2048 バイトとなっているが、これは Ethernet 上の TCP/IP の packetsize より大きい（Ethernet は 1500 バイト程度）。まだ全ての詳細が明らかになったわけではないが、packetsize が大きくなると、ネットワークでのワイヤースピードは間違いなく高速化する。

もちろん Ethernet もギガビットの時代が見えてきたので、すぐさまネットワークの標準仕様の座を奪われることはないにしても、FireWire が 800Mbps や 1.6Gbps になったとき、NetBoot は FireWire で、ということになる可能性は決して少なくないのではないだろうか。

# DTPで使うUSBの ハードディスクを使う

## 第11回

本来低速のデバイスを統合する USB だが、高速のデータ転送を要求するハードディスクや MO ドライブ、CD-R などのデバイスも当たり前のように USB 仕様で登場している。最速でも理論値で 1.5MB しかないの、やはり心もとない部分がある。実際に高速のデバイスでの使用感はどのようなものだろうか。

多分データ転送速度は期待できないだろうが、それにも増してホットプラグの便利さが大きければ、使ってみる価値はあるだろう。というわけで、USB のハードディスクを買ってきて使ってみた。

ちょうど外付けのハードディスクを買おうと思っていたのだ。取りあえず Ultra SCSI の外付けハードディスクを買う予定にしていた。外付けでも 4GB 程度で 2 万円強というところか。容量のパフォーマンスだけでいうと、IDE 仕様の内蔵ハードディスクが一番安いので、同じ値段であれば 3~4 倍程度のディスク容量にはなるはずで、それにするというのも考えないでもなかったが、その場合は当たり前のことだがハードディスクを付け替えることができない。

いまのところ 2 台の Macintosh をメ

インにしているのだが、そのときによって使っているマシンは違う。どちらか一方が塞がっているときは、もう一方を使うしかない。一番厄介なのは、メーラーを使うときで、2 台で別々にメールを受信していると二重にメールを落とすことになる。

それと、メールに添付するファイルや原稿、あるいは Web にアップするファイルなどもメーラーと同じマシンに置きたい。

New G3-300 と 7600 の 2 台の両方を切り替えて、メーラーとインターネットで必要とするファイルを使うためには、ホットプラグのハードディスクを使うしかない。それを考えるといまのところ USB しか選択肢はないのだ。

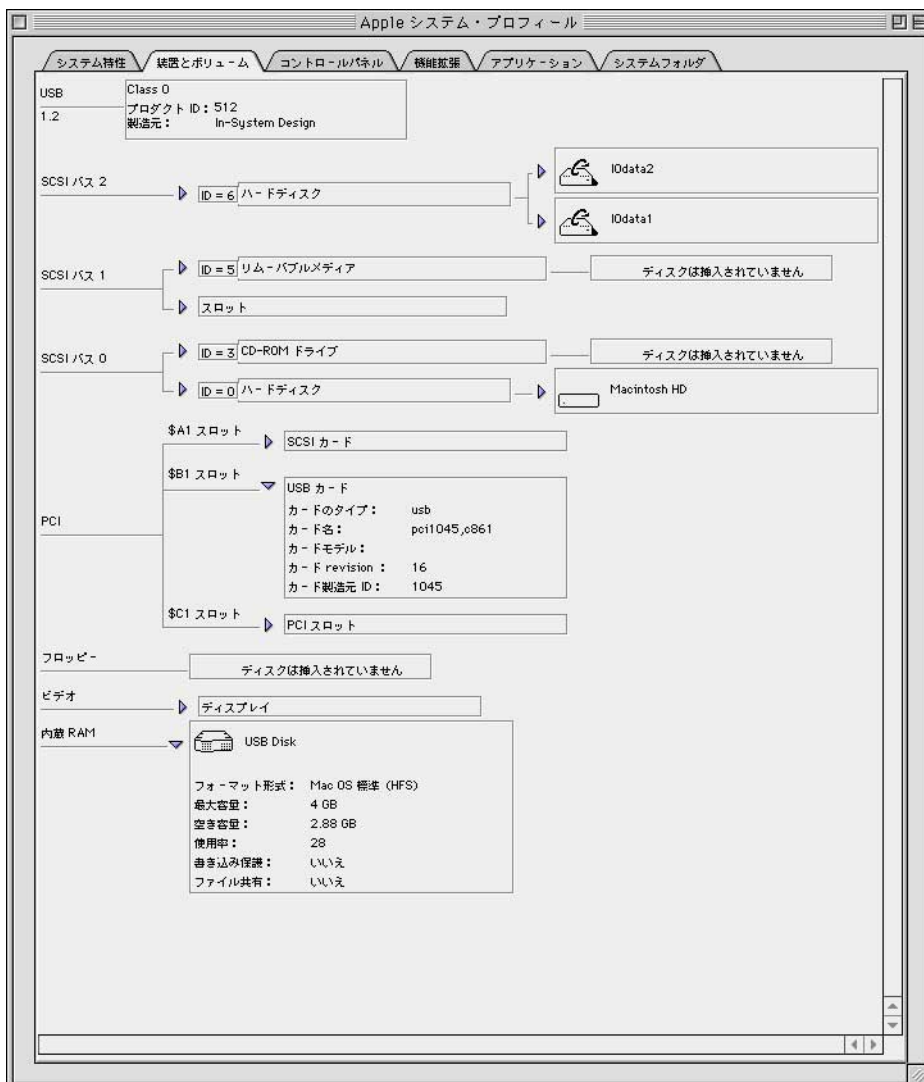
もちろんホットプラグなら FireWire の方がいいに決まっているが、まだまだ FireWire のハードディスクは種類は多くないし、安くなったとはいえそれほど安くもない。そのうえ 7600 には FireWire のポートはないのだ。しかし USB のカードはもう既にささっているので、USB のハードディスクであれば、両方で使うことはすぐにできる。

USB 仕様のハードディスクは 4GB のものが約 3 万円程度で、外付けのものより少し高い。多分中身は IDE のハードディスクで、USB を IDE に変換するコンバータがついているのだろうと思われる。

USB のハードディスクを使うためには、機能拡張ファイルが二つほど必要になる。また OS は Mac OS 8.5.1 以上が推奨となっている。New G3-300 が Mac OS 8.6、7600 は Mac OS 8.5.1 だからこれは問題ない。ついでながらシステムプロフィールを見ると、Mac OS の認識は、USB ではなく、内蔵 RAM の扱いになっている。

準備ができてハードディスクをつなぐと、OS がハードディスクを初期化するか聞いてくるので、HFS にするか HFS + にするかを選択するだけでよい。ちなみに買った USB のハードディスクにはペラ 1 枚の注意書きのようなものがあるだけで、あとは付属する CD-ROM の HTML が説明書になっている。

ホットプラグだから抜き差し自由かと思って、マウントしたまま USB のケーブルを抜いたら、アラートがでて怒られてしまった。ケーブルを抜く場合は、ハードディスクのアイコンをゴミ箱に捨ててから、抜かなければならぬらしい。しかし一度抜くともう一度マウントする



USB のハードディスクをマウントして、システムプロフィールを開く。USB ハードディスクは内蔵 RAM 扱いになっている。



ときはどうするのだろうか。やはりもう一度ケーブルを差し直すか、ハードディスクの電源をいれ直すしかないのだろうか。

これでメーカーを丸ごとと、DTP-SのHTMLファイル一式といままで書いた原稿類やその資料、そしてセミナー等の関係ファイルは全てUSBハードディスクに移した。まだ多少の不安があるので、オリジナルのデータはできるだけデスクトップマシンのハードディスクにも残してある。それらのデータを削除して、内蔵ハードディスクのダイエットも目的の一つだから、いずれは削除しなければならない。

さて速度の方はどうだろうか。実際のところUSBハードディスク上で、ARENAを起動すると、立ち上がりはかなり遅い。立ち上がったからはそれほどではないが、一呼吸おいてから読み込みが始まるような感じである。まあ、ある程度遅いのは仕方がないか。

また最初にファイルを100MB単位でコピーしていると、途中でとまったりと動作が安定しないこともあった。原因はよく分からないが、いまのところは問題なく動作している。USBであってもノートン先生は効くので、定期的に手入れするしかないかもしれない。

データ転送のスピードの方も計測してみた。MAC POWER10月号で、USBの640MBのMOドライブのテストがあったので、同じような条件でコピーして比較してみた。

そこではNew G3-300の内蔵ハードディスクからUSBのMOドライブへの書き込みは35秒、反対に読み込みは

19秒となっている。テストに使用したデータは1MB強のTIFFの画像ファイル7枚(7.5MB)となっていたので、同様のファイルを作成し、実験してみた。

New G3-300からUSBハードディスクへの書き込みは18秒で、その反対の読み込みは16秒であった。読み書きともに1秒間に400KB強で、使えないほど遅くはない。テキスト形式中心のデータであれば、まず問題がない。USBのデータ転送の理論値、1.5MBから考えると、まあまあの結果だろう。

多少の難点はなくはないが、それにしてもホットプラグは便利だ。歓迎すべきことかどうかは分からないが、USBのハードディスクを持ち帰り自宅のiMacにつなぐと自宅でも仕事ができるしまう。いやはやこの便利さを体感すると、やはりSCSIには戻れないことを確信してしまった。



# DTPで使う Yosemite 読本

## ATAの内蔵ハードディスクをセットする

### 第12回

画像素材のハンドリンクをしていると、内蔵の6 GBのハードディスクではとうてい足りないようになってきたので、新たに内蔵のハードディスクを付け足すことにした。

New G3では内蔵ハードディスクのベイが合計で三つ用意されているので、増設はそれほど難しくはない。ただしAppleでは内蔵ハードディスクにはSCSI使用のものを推奨しており、内蔵されているハードディスクと同じATA仕様のを増設した場合についてはサポート外になってしまう。

しかし、価格からいうと、3.5インチの内蔵のATA仕様のもは2万も出せば十数GBのものが買えるが、SCSIはそうはいかない。その上、UltraSCSIと比較すると、データ転送速度はATAの方が早いのだ。多少のリスクがあっても、安くてパフォーマンスの高いATAを使いたくなるのが人情だろう。

New G3のドアを開くと、向かって右側のベイにプリセットされたハードディスクが収まっている。これはもちろんATA仕様のもだ。その左側に二つのハードディスクベイがあり、増設したハ

ードディスクはこのどちらかにセットすることになる。

まずNew G3本体の底面にビスで固定されたハードディスクトレイを外し、それにハードディスクを固定し、もう一度ハードディスクトレイを本体の底面にビス止めする。あとは、ケーブルをつなぐだけ。

ケーブルをつなぐ前に、新しいハードディスクのデバイス指定が必要になる。IDEハードディスクのデバイス指定はマスターとスレーブに二つだけで、プリセットされたハードディスクはマスターになっているから、新しい方をスレーブにする。私の買ったIBM純正品はジャンパーピン仕様のもなので、二つのジャンパーピンの差し込み位置をかえて、スレーブモードにする。これをしないで両方をマスターにすると、内部のデータが破壊されたりするそうである。

さてハードディスクでもっとも注意しなければならないのは、実はケーブルであった。ハードディスクを買ったとき、同時に買い揃えたのは40ピンのIDEフラットケーブルであった。これは千円程で買える。このケーブルは増設用のケ

ケーブルで、ロジックボードにある ATA インターフェースから、一旦内蔵のハードディスクに接続されていたケーブルを抜き、代わりに増設ケーブルをつなぐようになっている。端にあるコネクタを ATA インターフェースを接続し、ケーブルの中間にあるコネクタを内蔵のハードディスクにつなぐ。そしてもう一方の端にあるコネクタに新しいハードディスクをつないだ。

電源ケーブルを差し込んで、ドアを閉じ、起動した。そして増設したハードディスクを OS の機能を使って初期化する。しかし振るまいがおかしい。ウィンドウがすぐに開かなかったり、ファイルのコピーに馬鹿みたいな時間がかかってしまうのだ。なにか間違ってるのかもしれないが、原因は不明。

可能性としては、やはりケーブルを怪しむしかない。内蔵のハードディスクは ATA-4 だから、本来であれば 40 ピンのフラットケーブルでいいはずなのだが、ケーブルをよく見ると、使われているのは 80 ピンのフラットケーブルであった。

IDE ハードディスクの進化形である ATA-4 対応の仕様は、理論値で最大 33MB のデータ転送が可能になっている。しかし高速である分だけ、信号の電気的特性にうるさく、ちょっとしたノイズの発生で信号が適切に転送できないこともあるようだ。安全性を考えると、ノイズの発生しにくい方法を使うほうがよい。そのほうがハードディスクは安定する。

Ultra DMA/66 では、安定性を優先して 40 ピンの信号を 80 ピンにして増

えたラインにシールドを割り当てて使用することになっている。Ultra DMA/33 の ATA-4 でも 40 ピンを使うよりも、80 ピンの方がデータの転送は安定しているということになり、増設ケーブルに 80 ピンを使うほうが間違いなさそうだ。ノイズを受けにくくする方法としては、内蔵ハードディスクから延長せずに、CD-ROM につながっているもうひとつの ATA インターフェースから延長するという手もあるらしい。

さてもう一度ハードディスクのパッケージを見ると、買ってきたものは Ultra DMA/33 ではなく、Ultra DMA/66 であった。IBM 製の「DJNA-371350」という回転速度 7200rpm、シーク速度 9.0ms で 13.5GB のものだが、その横に「ATA/66」と書かれていた。Ultra DMA/66 のハードディスクなので、ケーブルもやはり 80 ピンのものが必要なのだろう。しかしショップの店頭ではそういう話はなかった。もっともひよっとすると、もう Ultra DMA/33 の仕様のハードディスクは探さないと買えないのかもしれない。

というわけで、やはりケーブルは 80 ピンのものを使うしかない。安全を考えて 80 ピンの延長ケーブルはないかと探したが、見つけることができず、結局 45cm の 80 ピンの増設用のフラットケーブルを買ってきた。

もちろんこのケーブルは DOS/V 用のもので、うまくいくかどうかは、やって見なければわからない。ただし価格は安くなく、実売価格で三千円もした。

パッケージの背面に注意事項があり、青い端のコネクタのはマザーボード用、

中間にある灰色のコネクタはスレーブ用、もうひとつの端にある黒いコネクタはマスター用となっている。しかしスレーブの灰色とマスターの黒色まではたった 15cm しかなく、3.5 インチの二つのハードディスクを並べて 15cm で接続するのは少し無理があった。「注意事項は DOS/V 用についての話だろう、40 ピンのケーブルにはコネクタの位置は指定していなかったぞ」とばかりにそれを無視して接続したら、案の定、起動しなかった。

仕方がないので、注意事項どおりに灰色をスレーブに、黒色をマスターにむりやりつないだ。しかしこれが簡単にはつながらないのだ。ハードディスクをトレイから外して二段重ねしようかと思ったが、そうすると今度はドアが閉まらないのだった。またそれができても、精密な機器であるハードディスクを固定せずに使うというのは、無茶というものだろう。

結局電源ケーブルを一旦外し、フラットケーブルを折り曲げて目一杯引き伸ばすと、なんとかぎりぎりにつながったのである。できればマスターとスレーブの間を 20cm は欲しいものだ。

これで起動すると、Mac OS は正しく立ち上がり、動作もキビキビとするようになった。ハードディスクからハードディスクへのコピーは概ね 1 秒間に 5 MB 程度はあり、パフォーマンスとしては申し分ない。またフォーマットした後の容量は 12.6GB になり、かかった費用は 2 万円強だから、1 GB あたり 1,600 円程度なのでコストパフォーマンスの方も申し分ない。

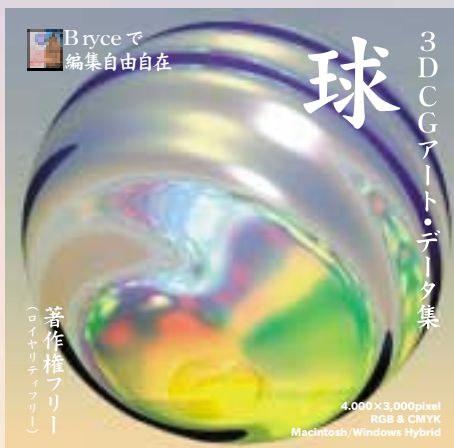


あなたのクリエイティビティを

# かなり刺激する

## Bryceで編集自由自在 3DCGアート・データ集

標準小売価格 15,000円(税別) 著作権フリー(ロイヤリティフリー)



### ● 4000ピクセル×3000ピクセルの高品位な3DCGアート集が誕生しました

この3DCGアート・データ集は「球」「地球」「世界・日本」の三書類。一種類のタイトルに4,000×3,000ピクセルと640×480ピクセルの3DCGの画像が各々80点。「世界・日本」は110点。高品位なレイトレーシングでレンダリングされた画像素材なので、簡単にDTPのレイアウト素材やマルチメディア素材として扱えます。画像のフォーマットはJPEG形式の最高画質で圧縮、CMYKとRGBモードで設定されています。

### ● Bryce のオリジナルデータで編集自由自在

一般の画像素材集では、素材はPhotoshopなどでレタッチすることはできますが、イメージそのものを変更することはできません。ところがこの3DCGアート・データ集には、オリジナルの3DCGのデータそのものが収録されています。もしBryceがあれば、オリジナルのデータをその場で編集し、オブジェクトを差し替えたり、カメラアングルやライティングを変更したりと、無限のイメージを必要な時に、必要なだけ作成できます

オリジナル



オブジェクトのカラーを変更



背景のカラーを変更



またオリジナルデータのレンダリング解像度を変更することで、4000ピクセル以上の高解像度でレンダリングし直すことができます。4000ピクセル以上でレンダリングすれば、ポジ出力が可能になり、B全のポスターまで拡大して使用することも可能です。Bryce2のファイルはMacintosh版のBryce3D、Bryce4でもファイルメニューから開くことができます、ただしレンダリング結果が多少変わることがあります。

※本製品はWindows/Macintoshでお使いいただけます。BryceのデータはMacintosh版でのみお使いいただけます。

制 作：東澤雅晴

発 売 元：有限会社インクナブラ

〒540-0025

大阪市中央区徳井町2-2-11 LM東本町第三-405

<http://www.incunabula.co.jp/>

# 連載コラム

# デジタルの 夜は明けた

第 152 回 InDesign 対 Illustrator (1999/09/09)

第 153 回 Web ジャーナリズムの責任の取り方とは (1999/10/05)

第 154 回 New CID の向こうにあるもの (1999/10/26)

第 155 回 QuarkXPress 3.3J を決断する (1999/11/04)

第 156 回 ワンオペレータ・ツインマシン (1999/11/26)



## InDesign 対 Illustrator

### 第 152 回

Power Macintosh G4 の発表で影が薄くなってしまったが、サンフランシスコシーボルトの初日に InDesign の発売が開始された。本来は印刷や出版をテーマにしたカンファレンスであるシーボルトでは、もっと InDesign について大きく報じられてもいいはずなのに、Power Macintosh G4 のあまりパフォーマンスに印象が薄くなったようだ。

もとより、時代の流れとともにシーボルト会議のテーマの変遷していて、たとえば Adobe の総力を結集した新しい DTP のレイアウトソフトの登場であっても、その価値が小さくなってしまっているのは否めないのだろう。

InDesign の評価はこれから、というところだが、日本語版の発売は今しばらくかかるに違いないから、それまでに英語版の評価記事を眺めて様子見を決め込むしかない。気のはやい人は英語版を使い込んでみるだろうが、ローカライズされたときに日本語組版がどのくらい実現されているのか、ということも関心事のひとつであって、とりあえず日本語版の発売まで待つしかない。

ボストンのシーボルトで発表されたと

きは、Adobe が放つ「Quark キラー」として紹介された。コードネームは「K2」。QuarkXPress の機能をはるかに凌駕し、さらに QuarkXPress のドキュメントを完全に取り込めるということで、QuarkXPress が築いてきた牙城を突き崩せるのではないかと、大きな期待が寄せられた。

この「K2」、もともと Adobe と Aldus が合併する前に（Aldus によって）開発が進められていたが、合併によって Adobe はページレイアウトソフトである PageMaker を手に入れたことで、開発はお蔵入りになったと言われている。

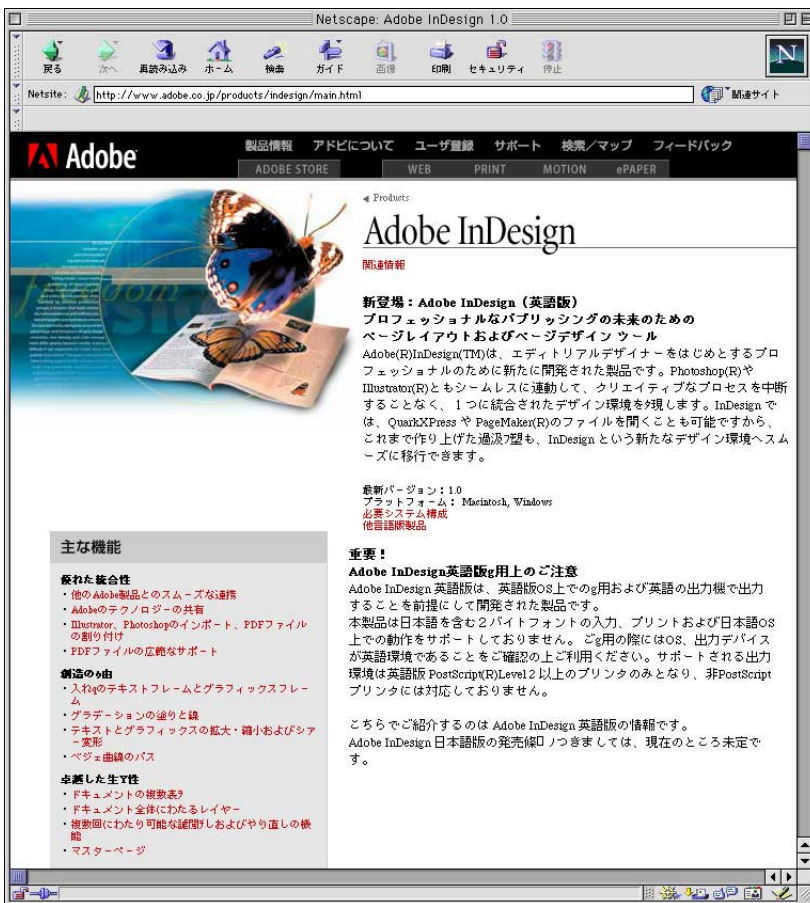
PageMaker はレイアウトソフトとしてはもっとも老舗で、記念すべき最初の PostScript アプリケーションであったが、印刷の実務上の機能が十分ではなかった。というよりビジネスユースよりのデスクトップパブリッシングを目指したこともあって、印刷向けの機能の開発は後手に回ったというべきだろう。そのため後発の QuarkXPress にマーケットを奪われてしまった。QuarkXPress は最初からフィルム出力を念頭において開発

されたといっても過言ではない。DTPの黎明機では QuarkXPress の出力は比較的安定していたが、PageMaker は出力エラーや出力不可といったトラブルが少なくなかったこともあって、レイアウトソフトのスタンダードは QuarkXPress が握ることになった。

Adobe は PageMaker での巻き返しを図ったが、その期待は果たすことができず、PageMaker による QuarkXPress 対策を断念し、新たにレイアウトソフトを作り直すことになった。合併前のソフトを再び取り出したというより、実際には白紙の状態で開発したと考えるべきだろう。過去の開発放棄されたソフトがなくても、同じようにいちから新しいソフトを開発したことはまず間違

いない。

InDesign の特徴を一言でいうと「Illustrator ライクなページレイアウトソフト」ということではないだろうか。こう言い切ってしまうと多少の誤解を受けそうだ。InDesign にはもちろん今の時代に、そしてこれからの時代に合わせた新しい機能がギュウギュウに詰め込まれており、その点が古いソースに縛られてしまう QuarkXPress との大きな違いではあるが、だからといって、それらの機能がすぐさま役に立つわけではなく、将来の期待値だけで QuarkXPress から乗り換えるかということ、やはりそれだけでは難しいのではないだろうか。取りあえず DTP のユーザーから見ると、マルチページが扱える Illustrator という感



InDesign 英語版の解説の URL は <http://www.adobe.co.jp/products/indesign/main.html>

触ではないだろうか。

いままで Illustrator も進化を続けてきて、ベクターソフトとしては、スタンダードになった。ライバルであった FreeHand は、日本ではそれほど普及せず、ベクターソフトでは Illustrator の右にでるものはいない。FreeHand にあって、Illustrator にないのはマルチページの対応と、透明度処理 (Illustrator 8.0 では一応プラグインで対応可能) くらいだ。これらの機能は Illustrator でも望まれている機能だが、だからといって Illustrator から FreeHand に乗り換えることはほとんどないようだ。

しかし Illustrator でマルチページを扱いたいという要望は決して少なくないと思う。8ページとか16ページ程度のドキュメントであれば、QuarkXPress を使うより、Illustrator で全てこなしてしまうことは珍しくないし、凝ったデザインをするのであれば、明かに Illustrator の方が融通がきく。

もし InDesign が Illustrator の操作性そのまま、マルチページ処理できるのであれば、Illustrator のユーザーで InDesign に乗り換えるユーザーは思ったより多いのではないかと思う。

もちろん InDesign の開発サイドでも、InDesign 上で Illustrator のプラグインを使えないようにしたり、パスファインダなどの特殊な加工は使えないように差別化を図っているようだが、所詮そのような機能は特別な場合に使うだけであって、「主」たる機能ではなく「従」の機能でしかない。おそらく InDesign にある機能だけで、いまの Illustrator

のユーザーが求めている機能はほぼ達成されるに違いない。PDF の読み込みにも対応するそうだから、Illustrator ではシングルページでしか読み込めない PDF も InDesign ではマルチページで読み込めるに違いない。

また Illustrator のプラグインであっても、いずれ作り替えられ InDesign 用のプラグインも同梱されて発売される可能性は決して低くない。そうすると、やはり InDesign は Illustrator のマーケットを食い潰していくことになる。少なくとも機能的には飽和しつつある Illustrator のバージョンアップを InDesign のユーザーが選択しなくなる可能性は非常に大きい。

InDesign は本来、「Quark キラー」として QuarkXPress のマーケットを侵食するために開発されているわけだが、実際には、それより先に身内の Illustrator のマーケットをの方がターゲットになると考えたほうがよい。

Adobe としては慎重に InDesign と Illustrator の棲み分けを考えなければならぬ。しかしだからといって、InDesign の機能を制限すれば、「Quark キラー」としての役割が十全に果たせるわけではない。ひょっとすると、InDesign は Illustrator の機能を飲み込んでいって初めて、「Quark キラー」になれるといってもいいのかもしれない。

多分特殊なベクターデータを作成したい Illustrator ユーザーにとっては、Illustrator はこれからも必要だろう。しかし一般の DTP ユーザーにとっては、InDesign の機能だけで十分ということになる。しかも InDesign は比較的安く

価格設定されるだろうから、乗り換えは難しくないだろう。

InDesign の日本語版のリリースは早くても年内、遅くても来年の春にはリリースされるとみるのが順当か。実際リリースされてみないことには、Illustrator のユーザーが乗り換えを考えるかどうかはわからないが、トータルで考えたときに、これから DTP をしようと考えたときに、価格の高い QuarkXPress と Illustrator を買う代わりに、InDesign と Photoshop だけですましたいとするユーザーは増えてくるに違いない。

もしその通りに QuarkXPress のマーケットを侵食したとしたら、当然 Quark も反撃に打ってでるに違いないから、ユーザーとしては果実が熟すのを待てばよい。QuarkXPress のあまりの高さは、印刷・出版業が昔の特殊な業界であるころならともかく、いまのように DTP が普及してしまった時代には、時代錯誤といってよい。InDesign の登場は、気位を下げることでできない Quark にとっても、価格引き下げの口実になるはずだ。

Illustrator にしても、当然今後のバージョンは今まで以上に魅力的な機能を搭載して InDesign との差別化を図ることになるに違いない。InDesign の登場によってマルチページ化はまず考えられないとしても、重なり合ったカラーをオーバープリントする透明度処理や、フォントの CMap ファイルの指定、また出力時にフォントのアウトライン化だけではなく、解像度指定したビットマップ化による出力（ビットマップ化すれば太らないし、プリンタフォントもいらなくなる）

などなどまだまだ追加できる機能はあるだろう。シングルページであるが故の身軽さで、先進的実験的な機能を追加していくことは可能であろう。

いずれにしても、InDesign の普及は Illustrator ユーザーから始まると考えたほうがよいし、またそのほうが普及は進むに違いない。Adobe の身内のソフトで骨肉の競争が行なわれることになるだろうが、そういう競争の中にこそ、InDesign の価値が生まれ、新しいユーザーが獲得されてくるのではないだろうか。InDesign の登場で、DTP がさらに飛躍することを期待したいものである。

(1999/09/09)



# Web ジャーナリズムの責任の取り方とは

第 153 回

さきごろ Web 上で ASCII24 と Apple の対決があった。Web ジャーナリズムの一端を見せてくれる事件だったように思う。

ことの起こりは、WORLD PCEXPO で日本初公開の iBook と G4 のベンチマークテストを、会場の展示機を使って行い、それを ASCII24 が記事にしたものだ。テストは Apple の許可なく行われ、しかも一般来場者が iBook や G4 を一目見て触りたいと長い列を作るなかで、公然と行われた。

結果、独断で行ったテストとその記事は Apple からの抗議をうけたものの、ASCII24 はこの抗議を拒否し、抗議を受けたことをあきらかにしたものの、記事の掲載を続けた。しかしその後、読者からのメールが ASCII24 編集部にも多数寄せられたようで、編集部は記事を削除し、「お詫び」することになった。

ここで興味深いと感じたことが二つあった。まず Web のニュースサイトが、ただ単に最新のニュースをアップするだけでなく、よりおもしろい記事、よりエキサイティングな記事を掲載していくことを強く意識しはじめたということであ

る。つまりニュース性・速報性だけでなく、エンターテインメント性を全面に押し出そうとしているのだ。アクセスを上げるために、話題性を優先するようになった。「ニュースセンター 9 時」ではなく、「ニュースステーション」を目指すといったところか。

だから会場にしかない未発売の展示機に、ベンチマークテストのソフトをインストールして、その結果を WORLD PCEXPO の期間中に Web にアップしたらおもしろい、と思ったわけである。インターネットの速報性を十分に生かせるし、誰もが注目してるマシンのベンチマークテストであれば、話題性も申し分ない。

しかし問題は、それを Apple にいっさい打診せず独断で行ない、それが社会的に許されると勘違いした点にこそある。だから Apple からの抗議があっても、

「月間 240 万ビューの読者のために、こういう記事は必要だ」

みたいな編集部のコメントがのったりする。月刊にして 240 万も見られているのだから、そのサイトをより魅力的な



モノにしていくためには、今まで以上に読者が期待するニュースや記事を掲載しなければならないということだろう。

このコメントには明かに、数（ビュー数）が多いのだから、多少の事は許されるということが明言されている。つまり多くのニーズがあるのであれば、たとえ非常識なことをしても、あるいは他人に迷惑をかけても、たくさんのニーズに応えるのであれば、当然認められてしかるべきだと言っているわけだ。要するにその姿勢は、あることないこと調査もせず、平気で記事にする三流の週刊誌や夕刊誌と変わらないのである。もっと言えば、その発想は、ダイアナ妃をオートバイで追っかけ死に至らしめたパパラッチにも

通ずるものがあるだろう。パパラッチでも、自分たちのしていることは「読者のニーズがあるからだ」と開き直っているのである。

まずよく考えないといけないことは「240万ビュー」の責任というものは、本当に興味本位の記事を提供することなのか、ということだろう。それは責任ではあるまい。読者が面白がって読むだけの記事を提供するのは、単に「迎合」と呼ぶべきではないのか。

やはり ASCII24 の編集部は「240万ビューの責任」を履き違えていたのである。だからこそ、Apple の抗議が掲載されたあとにやってきた、数多のメールに説得されたのである。いくつものメー



ASCII24 に掲載されたベンチマークテストのお詫びの URL は <http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/0917/topi16.html>

ルを読んで、きっと

「やりすぎた」

と感じたに違いない。読者が喜ぶと思  
い、行なった行動と記事のつもりが、実  
は読者の反感を買っていることに気が付  
いたのである。

そしてこの読者のリアクションの影響  
が即座に現れ、掲載された記事が削除さ  
れ、そして「お詫び」が掲載されること  
になったのである。この転換の早さが、  
この事件のもうひとつの特徴といっても  
よいだろう。

アップルからの抗議の申し入れがあっ  
て、「お詫び」を掲載するまでの約9日  
間、編集部内では様々な議論が展開さ  
れたに違いないが、結局はメールの声が一  
番大きかったようだ。「過ちて改めざる  
は、これを過ちという」わけだから、  
ASCII24の素早い対応は結果的には間  
違っていなかった。

印刷媒体では、刷ってしまったらもう  
訂正することは出来ない。せいぜい次号  
で訂正とお詫びを目立たない隅のほうに  
ひっそりと掲載することくらいしか  
ない。しかもお詫びするのは余程でないと  
行われぬ。TVに至っては、取材方法  
に間違いがあったなどということは、一  
般視聴者からの抗議があっても、余程で  
ないとまず取り合わないだろうし、お詫  
びするとしても、裁判で負けたらしぶし  
ぶという程度かもしれない。

Webでは記事を削除し書き換えるの  
は容易いということがあるにしても、メ  
ールでの抗議や意見の影響が極めて大き  
いことが見えてくる。おそらく同様の内  
容のメールがたくさんやって来れば、そ  
の心理的圧迫感はかなり大きいといえる

のではないだろうか。メールでの抗議は、  
電話やFAXという今までの方法より  
も、確実に伝わるものなのである。

これからますますWebの社会に対す  
る影響度は高まることはあっても、少な  
くなることはまずない。今後もいろい  
ろな事件が起こるに違いないが、そうい  
う事件を経て、いずれころあいの着地点  
が見えてくるに違いない。

今回はASCII24の「やき過ぎ」で終  
結したが、東芝のように不用意な対応を  
公開されて、メーカーが足元を掬われ  
るような事件もこれからも増える可能性  
は少なくない。そのことによって、社会  
はよりディスクロージャーすることが重  
要になってくるだろう。そのことは歓迎  
すべきことであっても、今度はディス  
クロージャーに対する責任の取り方が課  
題になってくるように思う。

これはASCII24という大きなサイト  
だから起こったことではなく、私の方  
のような個人サイトでも考えていかな  
ければならない問題だろう。Webに  
関わる以上、サイト公開の責任をどう  
考えるのか、ということはこれからの  
大きなテーマであることは間違いない。  
またアクセス数が多くなれば多くなる  
ほど、その責任も大きくなるに違  
いないのだ。

(1999/10/05)

## New CID の 向こうにあるもの

### 第 154 回

モリサワが8月に New CID フォントをリリースしたことで、やっとほとんど全てのフォントでアウトラインプロテクトが解除された。スタンダードフォントのプロテクト解除は、やはりエポックメイキングな事件と捉えるべきだろう。

プロテクトを解除するにしても、時期としては遅きに失したのではないか、という意見もあるだろう。せめて最初の CID のときにプロテクトが解除されていれば、業界内部の CID フォントに対する視点も少しは変わっていたかもしれない。

しかしとはいっても、なにもしなくてもプロテクトのかかったフォントが売れていくのであれば、プロテクトを解除しなくてもいいのではないかとモリサワが考えてもそれもまた不思議ではない。企業が利益を目的とする以上、自社にとって不利益となる行為を行うわけではなからだ。

だから今回のアウトラインプロテクトの解除は、モリサワにとっても、自社の利益となる、と判断した結果だと言えなくはない。DTP の裾野が広がっていくなかで、フォントの位置づけも大きく変

わっているから、これ以上アウトラインプロテクトを続けていくのは、逆に不利益が大きいのである。

フォントの位置づけの変化でもっとも端的なものが、PDF へのフォントの埋め込みであろう。PDF を普及させるためにはフォントは埋め込みは不可欠である、という大合唱があまりに大きかった。もちろんその合唱していた一人に私もいたが、PDF にフォントを埋め込むために、アウトラインプロテクトが解除されたといっても言い過ぎではない。

しかしそうすると、PDF にフォントを埋め込むことがモリサワの利益になるのか、という疑問が残る。「時代の流れだから、エンベットに対応した」というのはその通りだろうが、それだけでなく、モリサワにとってもアウトラインプロテクトは、自社のビジネスの成長を阻害する原因になっていたのではないだろうか。

DTP のスタンダードフォントは「モリサワフォント 23 書体」というのは、いささか正確ではない。スタンダードになっているのは、OCF フォントのモリサワ 23 書体である。



残念ながら日本の DTP (Desktop Prepress) にとってはそれ以外のフォントは全てプラスアルファの存在でしかなく、十分条件であっても必要条件というわけではない。

しかもその十分条件のフォントのなかには、モリサワフォントのスタンダード 23 書体以外のフォントも含まれている。スタンダードになりえたのは、MB101 ゴシックまでで、それ以後モリサワがリリースしたフォントはことごとく売れていない。だいぶ前に知り合いのデザイナーが毎日新聞書体が必要になって、ディーラーに問い合わせたら、流通在庫すらないと言われたことがあった。他のフォントも同様で、フォークやタカハンドや教科書体といったフォントを使っている人を私はほとんど知らない。

つまり今の状況を続けていけば、OCF のスタンダード 23 書体は売れるかも知れないが、それ以外の新しいフォントはほとんど売れないことになる。もしユーザーがスタンダードフォント以外のフォントを使いたくなったとき、間違いなくプロテクトのほどこされたモリサワフォントは選択しないに違いない。他社のフォントの方が、価格も安いし、アウトラインプロテクトもかけられていないからだ。

モリサワが今後フォントビジネスを成長させていこうと考えたとき、アウトラインのプロテクトはあきらかに足枷になる。現に New CID フォントと同時にリリースされた学参フォント 15 書体のカタログを見ると、「PDF に埋め込めば、プリンタフォントがなくても出力できます」というようなことが書かれている。

つまりエンベットとアウトライン化を認めれば、スクリーンフォントだけでも売ることができるのである。もちろんそうになると、プリンタフォントはいずれ売れなくなっていくかもしれない。そこでの利益は失われる可能性があるが、フォントベンダーとしてはより多くのフォントを販売したいと考えるのもまた当然である。いまの現状を維持していく方法を選択するのか、それとも、リスクをとってスクリーンフォントを多く販売していくか考えたとき、後者を選択せざるをえなかったのである。

それ以外にも、PDF の普及に最大級の力点を置いている Adobe との関係性を考慮したり、写研を抜いて名実ともにトップのフォントベンダーになったという事情もあつただろう。

モリサワにとってもフォントのアウトラインプロテクト解除は、必然であつたと言えなくはないのだ。

というような後講釈はさておき、それでも、フォントエンベットに対応しアウトラインプロテクトを解除したことは「快拳」と言ってもよい。その点については、素直に評価すべきである。それはそれで、やはりモリサワにとっては勇気がいったことではないか。New CID フォントは発表されても、「なにが New なんだ」とか「まだまだ値段が高いぞ」とかいった点を指摘されたものの、それでも大きな目で見れば間違いなく大きな前進である。たとえどのように非難されても、フォントエンベットもアウトライン化も頑なに拒否し続けることもできたのだから。

何だかんだといっても、「人の噂も 75

日」であって、当初言われた欠点はそれほど気にならなくなるにちがいない。そしてプロテクトを解除したモリサワフォントはマーケットに受け入れられるだろう。OCF のサポートが打ち切られることもあって、間違いなく New CID と CID フォーマットの普及は進む。

New CID のリリースはモリサワの考え方が大きく変わったことの証しでもある。自社のスタンスを一方向的にユーザーに押しつけるのではなく、マーケットを意識はじめたことも確かであろう。

モリサワのフォントビジネスが、たとえば PostScript 純正という砦に守られていたとしても、いずれは守りきれなくなることは自明のことで、いずれ確実にスクリーンフォントオンリーでラスターライズするのが当たり前になる。Windows ではすでにできていて、Macintosh でそれができない理由はなに一つない。

Apple からみると、TrueType でのスクリーンラスターライズは時間の問題だろう。TrueType を高解像度スクリーンラスターライズする道を、真っ直ぐ突き進むと考えてもよい。

Mac OS X で PDF ベースになると、プロテクトの施されたフォントは魅力が大きく減退する。最終的には全てのフォントは ATSUI の下に置かれるので、PostScript CID も ATSUI が管理しなければ、OS 上の機能は制限される可能性は少なくない。そしてそれはもう秒読みの段階で、Mac OS 9 でも、PostScript フォントも OFA でレンダリングされることになった。Mac OS X では ATSUI 下の TrueType であれば、OFA のレンダリングによってイメージ

セッタからでも高品位の出力できるようにしていくに違いない。

そうなったとき PostScript フォントは、実質的にプロテクトフリーの TrueType と競い合うことになる。CID の「sfnt」している部分というのは、本来は TrueType フォントのものであって、同じ機能を TrueType が持つことは多分可能だろう。ただし、ただ同然の価格になった TrueType フォントに、手間をかけてそういう機能を持たせるかどうかは難しいものがあるだろうから、PostScript CID の TrueType に対して差別化するとしたら、CID フォントのみの特徴を前面に押し出していくしかないだろう。

TrueType フォントと比較したとき、CID コードによって字形をどんどん増やしていくことが簡単にできることと、それを CMap でコントロールすること以外に、CID フォントのメリットは一体どこにあるというのだろうか。

もしモリサワが生まれ変わろうとしているのであれば、自社のフォントをこれからもユーザーに使い続けて貰うために、いままで以上に CID フォントフォーマットの利点を最大限に引き出す努力を行なうべきではないのだろうか。字形を増やす話も、OpenType まで引き伸ばしてしまったが、そういう待ちの姿勢はいたってよろしくない。どんどんと積極的に打ってできるべきではないのだろうか。

CID の機能からいうと、まだまだ全ての機能を十二分に活用しているとはいえないのだ。それを待っているのではなく、自ら働きかけるという姿勢が求めら



れるように思う。フォントのエンベツトとアウトラインプロテクトは、モリサワにとってはルビコン川であって、もう引き返すことのできない立場に来てしまったのである。OCFの販売とサポートを打ち切ることを決めた以上、CIDの魅力が社会的に認知させることが必要である。

おそらくCIDのメリットが認知されていけば、たとえプリンタフォントビジネスでの収益を失っても、それ以上の収益がスクリーンフォントから得られるに違いない（というより、そういうビジネスモデルを考えるしかない）。

少なくとも名実ともに日本一となったフォントベンダーには、それだけの社会的な責任があるはずだし、けっしてできないことではない。もちろんこのことはモリサワ1社がすればいいものではなく、フォントベンダーの業界が揃って、PostScript CIDの価値を布教していかなければならないが、その音頭を取るのは、やはりリーディングカンパニーのモリサワではないだろうか。

(1999/10/26)

## QuarkXPress 3.3J を 決断する

第 155 回

こここのところ復調し、業績を伸ばしてきた Apple の業績が一息ついてしまった。業績が悪化している原因はデスクトップマシンの販売が予定より進んでいないからだという。コンシューマ向けのマシンは好調だが、プロ用のマシンはいまいち伸び悩んでいるようである。

原因は CPU の供給不足にあるというのは正しくない。いや少なくとも日本ではブルーベリーの G3 にしてもグラフィートの G4 にしても、品不足ということはなかった。小売の店頭では、iMac や iBook のように予約しても手に入らないということはないのである。ほとんどがいつでも即納できるのだ。

思ったほど売れないとすれば、やはり Macintosh のもっとも大きなマーケットである DTP 業界で新しい筐体の Power Mac が使われていないからだろうか。

本来であれば、DTP 業界で買い替え需要がもっとあってもいいはずだが、実際には New G3 ではフロッピーディスクがなくなり、プロテクトフォントがインストールできなくなったため、買い替えにストップがかかってしまった。まあ

OCF フォントがインストールできれば、New G3 の移行ももう少し進んだかも知れないが、実際には New G3 を使うということは、DTP のフォント環境を CID に全て移すという決断が必要になる。CID フォント、正確に言うとスタンダードになっているモリサワフォントについて言えば、OCF と CID は完全な互換性があるわけではなく、しかも両者の混在は非常にトラブル招くので、保守的な DTP 業界では受け入れが進まなかったわけである。

新しい筐体を持つ New G3 ではフォント環境が、DTP 関係者の乗り換えや買い増しにストップをかけた。その上、Mac OS 8.5 のフォントのマネージメントが ATSUI に移行し、フォントの表示でさまざまな不具合が発生した。不具合の大半は Mac OS 8.5.1 で概ね改善されたが、ATSUI が実質的に丸漢フォントを不要にしたため、ビットマップフォントの縦組みで、約物や拗促音のシフト文字が表示されない現象が発生した。

その上、Mac OS 8.5 以降はシステムが要求するメモリが増えるだけでなく、最初から開かれているファイル数が多い

ため、重たい DTP アプリケーションでは、動作が不安定になる。Illustrator などでは起動時に多数のプラグインファイルが開かれ、それだけでもシステムに負担がかかるため、いくつものアプリケーションを同時に開いていると、システムエラーの頻度はけっこう低くない。

もちろんそれ以上にパフォーマンスが高ければ、「乗り換えや買い増し」は進むだろうが、従来とは違って変わった斬新な外観は、購入を躊躇させることもあった。機能性を考えると、良く考えられているわけで、ユーザー本位で真剣に設計されていることが伝わってくるが、いままでオフホワイトしか馴染んでいなかった人間にとって、ブルーベリーカラーの筐体はすぐさま納得できるものでなかったこともたしかであろう。

もちろん印刷業界が業務用として捉えれば、外観はほとんど関係ない。筐体の持つイメージより、能力や機能と言ったパフォーマンスが重要だから、今までの古い機種の中かでその安定性ととも安住するか、多少のトラブルをはねのけても新しい機種を使いこなしていくのという選択を迫られたとき、新しい筐体のマシンにそれ以上の魅力があればいいわけである。しかし、SOHOなどでMacintoshを使っている場合は、外観はけっこう重要になる。それだけでも購入を躊躇するのも仕方ない。

そんななかで G4 がグラフィイトカラーで登場した。いままでのブルーベリーの派手なカラーから、燻し銀のようなグラフィイトになったことで、新しい外観の Power Mac G4 は口うるさいデザイナーなどからも好感をもって受け入れら

れたようで、G3 で「乗り換えや買い増し」しなかった SOHO などのユーザーは Power Mac G4 を買っているようである。

しかし Power Mac G4 では DTP するうえで、また新たな問題が発生した。それは ADB ポートがあっさりとなくなったことである。もとより予定されていたこととはいえ、やはり実際 ADB ポートが無くなると、DTP では大きな障害になる。

障害とするもっとも大きなものはアプリケーションのプロテクトであろう。つまり ADB ポートにセットされる dongle というハードウェアプロテクトキーの存在である。dongle はアプリケーション起動時に ADB ポートにアクセスして、プロテクトキーが返ってこなければ、アプリケーションが起動しないようにする。

dongle は高額のアプリケーションにはコピー防止の目的で付けられていて、QuarkXPress だけでなく、何十万円を超える DTP の専用ソフトにはたいてい付けられている。出力の現場では dongle の数珠つなぎという現象も珍しくないようだ。

しかし何といたっても一番の問題は、QuarkXPress のプロテクト解除の方法に制限があるため、実質的に QuarkXPress を使う場合、グラフィイトは使えないということになる。

もちろん QuarkXPress 4.0J を使えば、ADB 以外でプロテクトキーを提供して使う方法がある。しかし現実には QuarkXPress 4.0J の普及は、ほとんど進んでいない。DTP 業界で言うところの「QuarkXPress」とは、一つ前の

3.3J だからである。

クオークジャパンでは、3.3J のプロテクトを dongle 以外の方法で提供していないし、本音では、4.0J にバージョンアップしてくれ、と思っているので、これからも 3.3J が dongle 以外の方法を使ってグラフィック以降の Power Mac で使えるようになる可能性はまずないだろう。

そうしたとき、ユーザーはどのような反応をするのだろうか。選択肢はいくつかあるが、結論からいうと、それは Quark の将来にとって必ずしもプラスではあるまい。

選択肢の一つは、3.3J から 4.0 にバージョンアップすることだが、バージョンアップフィーの価格の割には、機能の向上が抜きんでしているわけではない。1本や2本しか使っていないところでも高額であり、何十本も QuarkXPress を使っている出力センターや印刷会社にとっては、QuarkXPress 4.0J のバージョンアップは気の遠くなるような話であろう。

基本的に DTP は今までのワークフローの変革で、制作面でのトータルコストが大きく下がったから普及したのであって、レイアウトソフトであっても高額なものは、バージョンアップによってそれだけのコストダウンを期待できないのであれば、導入されないとしても全く不思議ではない。

次の選択肢は、新しい Macintosh はこれからも使わずに、旧式の Macintosh を使い続けるというものだ。G3 でなくとも PowerPC604 クラスであれば、当分使い続けることはできない

ことではない。また実際に大規模な制作システムを組んでいる印刷会社では、制作システムの安定性を最重点に捉えていることから、G3 や G4 に移行する予定は考えていないようだ。QuarkXPress は 3.3、Illustrator は 5.5、Photoshop は 4.0、Mac OS は 7.6.1 で十分という考え方も成り立つ。

もうひとつの選択肢は、しばらく我慢して、来年に QuarkXPress を捨てるというものである。つまり大きな期待のかかった InDesign が、もし QuarkXPress 3.3J 以上の操作性と安定性と機能性を備えているのであれば、それに乗り換えるというものである。強固なプロテクトがかかっている、しかも機能面においては 4.0 ですらまだまだ未整備である以上、これからも QuarkXPress を使うことがメリットがあるかどうかは様々な点で考慮されるに違いない。

もちろん InDesign は最終の出力という点では、まだまだ見えない部分が多いから、すぐさま普及するかどうかはわからないものの、それでもユーザーにグラフィック以降の Power Mac を使いたいし、優れたページレイアウトソフトも欲しいということになれば、価格も手頃といわれる InDesign がそのニーズを埋めてしまうことは想像に難くない。

Apple がグラフィックをたくさん売るのであれば、G4 の最下位のマシンは ADB ポートを付けるという選択もあっただろう（今からでもできないわけではない？）。G4 の最下位のマシンはロジックボードは Yosemite と同じものだから、ADB ポートは簡単に付けることができたはずである。しかし当初の路線に



したがってあっさり廃棄した。穿った言い方をすれば、ADB ポートの廃棄は、必要以上のプロテクトを認めないという Apple の姿勢の裏返しでもある。Macintosh の普及のためには、必要以上のプロテクトはやはり好ましくないからである。

QuarkXPress から InDesign への移行は一瀉千里に進むとは思えないが、いまの流れからいうと、乗り換えはそれほど遅滞することなく進むだろう。Quark としては、InDesign の失策待ちということになるに違いない。InDesign が使い物にならないと言うことになれば、ユーザーは QuarkXPress を使うしかない。そしていずれは 3.3J が使えなくなったとき、高額バージョンアップフィーを払って 4.0 に移行するしかない。しかし、おそらく Adobe は InDesign のベータテストを入念に行なうだろうから、致命的なミスが発生することはまずないだろう。そうすると、QuarkXPress 3.3J のユーザーが、未知ではあるが将来性のあるレイアウトソフトを選択する確立はかなり高いとみなしなければならない。

Quark に残された道は、グラフィイト以降でも QuarkXPress 3.3J を取りあえず使えるようにしておき、ユーザーの InDesign への転出をできるだけ押さえて、時期の 5.0J でどれだけの挽回策をとれるのか、という点にかかってくるのではないかと。QuarkXPress 4.0J はかつての Illustrator 7.0J のように、空白のバージョンになる可能性があり、それにこだわるよりは、次の展開を有利に導くようにしていくかない。

つまり厳しい見方をすれば、4.0 は捨てて、今からでも 3.3J が ADB なしでもインストールして使えるようにするしか、QuarkXPress というソフトが今後生き延びていく道はないのではないだろうか。たぶん一度 InDesign に移行してしまったユーザーはもう QuarkXPress には戻らない可能性が高い。

一番いいのは、QuarkXPress 3.3J のプロテクトを解除してしまうことである。もう Quark は 3.3J からほとんど利益を得ることはできないのだから、プロテクトフリーにしてしまっても、Quark という会社が不利益をこうむることはないだろう。むしろ、今からでもあっても、3.3J のプロテクトを解除することで、Quark は業界から見直されることになるのではないかと。

取りあえずプロテクトフリーにした 3.3J でマーケットを確保し、次期のバージョンで失地回復を図るというのが、今の Quark がとるべき最善の道だろう。印刷会社によっては、いまでも安定性を最重点に考えるところもあるが、印刷会社自体が、新しい取り組みを図らないと生き残っていけない環境の中で、いままでのように使い慣れていたから、という理由だけで、旧来のアプリケーションを使い続けるということは、これからは少なくなっていくだろう。Quark が逡巡している時間はそれほど多くない。

最後に一句。

ドングルを させず使えず グラフィイト

InDesign の 漁夫の利かな

(1999/11/04)



## ワンオペレータ・ ツインマシン

### 第 156 回

New Power Mac を使っているとオープンドア思想にだんだん染まってくる。内部にいともかんたんにアクセスできるから、つい中を開けていろいろ増設したくなる。ATA ハードディスクの増設はすこし手間取ったが、それでも増設は楽しい。DOS/V 機組立論者の気持ちが少しはわかるようになってきたのかもしれない。

旧型のデスクトップマシンは内部の増設ベイがひとつしかないし、増設が手間なこともあって、ストレージ関連のデバイスは基本的に外付けであって、内蔵することはあまりなかった。結局外付けされたデバイスは筐体の上に乗せていくしかなくなる。MO ドライブ、ハードディスク、ZIP、CD-R とどんどんつないでいくと、筐体の上やまたその周辺はまるでおもちゃ箱のように雑然としてくる。

しかし New Power Mac の筐体のデザインは、外付けのデバイスを受け入れがたいものがある。デバイスを積み上げていくにはかなり無理がある。筐体の上にひとつ乗せる程度だろうか。基本的には増設は内蔵ということだろう。

New G3 をパフォーマンスを内蔵し

て強化していく理由にはもうひとつあって、それは、モニタ回りをすっきりさせたいということもある。なぜモニタ回りをすっきりさせたいかという、一台のモニタに 3 台のマシンがつながっているからなのである。New G3 と 7600/120 + Booster233 ともう一台 Windows マシンもモニタにつながるのである。Windows マシンは単にハイブリッド CD-R のマウントの確認にしか使っていないのだが、それでもモニタは共有されている。

しかし Windows はモニタの共有には向かないマシンで、モニタを接続しないで起動すると、セーフティーモードになってしまう。そのまま起動しても最低限のモニタ表示しかしないのである。一応グラフィックボードが入っていて、VRAM に 4MB 程度積んでいた筈なので、19 インチモードでもフルカラー表示するはずだが、モニタがつながっていないと、設定したモニタのサイズと解像度は無視されてしまう。その場合はもう一度解像度を変えて続けて二度再起動するしかない。19 インチ、フルカラーで表示するためには、モニタを接続したま

まで起動するしかない。もともと Windows という OS はデバイス主義というよりデバイスの奴隷なので仕方がないが、ちょっとかわった使い方をする場合は、使い勝手がすこぶるよくない。それともこの現象は、安く買った私の Windows マシンだけの現象か。

さて話を戻そう。

いずれにしても、人間の目はひとつのところしか見ることができない。聖徳太子のように受け答えは一遍に七つもできるような超人はいるかもしれないが、それでも目は二つしかなく、ひとつの視点しか持ちえない。したがって一度に使えるモニタは一台ということになるが、しかしモニタに接続したパソコンは複数あってもよい。頭の中で複数の考え事を平行して考えることは十分できるからだ。

デザイナーがクライアントの異なる二つのデザインワークを同時平行で考えていることは別に珍しいことではないだろうし、Macintosh がそのデザインワークを具現化する道具だとすると、複数のアイデアを延長する道具も同時平行していてもよいだろう。

二つのデザインワークを同時に行うとしたら、二台のコンピュータシステムがあってもいいわけだが、そうなるとモニタが二つ必要になる。また使用するコンピュータを切り換えるときに身体を動かさなければならない。モニタとキーボードの共有ができれば、身体を移動させずに二つの作業を同時平行できるわけだ。

スペースをできるだけ効率的にするのであれば、二台のパソコンをひとつのモニタに接続してキーボードを共有する。そしてできれば一発でモニタとキーボー

ドを切り換えたい。

この方法で二つのパソコンを共有するときのポイントは、まず二つのマシンのパフォーマンスをできるだけ同じにするということだろう。マシンのパフォーマンスに大きな開きがあれば、当然「主」と「従」の関係が明確になってしまうので、二台を使いこなすというわけにはいかないだろう。つまりいつも使用するマシンと、たまに使用するマシンがはっきりしてしまうのだ。両方がいつでもメインマシンになるということが重要である。

そのためには、データも共有しなければならない。それがふたつめのポイントである。一番いいのは、サーバマシンを別に用意することだろう。それができればいうことはないが、いずれかをサーバにして、データを容易にやり取りできるようにするしかない。データの共有は AppleShare IP を使えば、5MB/sec 程度は可能だから、多少重たいデータもそれほどストレスなくコピーすることもできるだろう。そのとき必要なのは、大容量のハードディスクということになる。

しかし本当に一人のオペレータで二台も必要なのか、という疑問はあるだろう。当然二台必要かどうかは、作業の量による。作業量がすくないのであれば、もちろん二台もあっても宝の持ち腐れとなる。

だが DTP では作業に要求する時間が著しく少なくなっているので、急ぐときは複数の作業を同時にこなさなければならないこともある。そういうときは二台あったほうが間違いなく効率的だろう。少なくとも二台あれば一台がプリント待

ちの間でも、もう一台で作業は可能だ。Photoshop で画像を加工しながら、別の一台でレイアウト作業することもできる。

DTP をしながら、全く別のカテゴリーの作業をしなければならないこともあるだろう。たとえば 3D ソフトやオーサリングソフトを使ったり、Web サイトの構築をしながら、レイアウトソフトを扱うということもあるに違いない。

たとえパソコンといえども、コンピュータは複数のアプリケーションを同時に使用できるのが、本来の在り方である。しかし、マシンの性能が向上しても、アプリケーションの機能もそれに歩調を合わせて肥大化し、高度なアウトプットが達成されたにも関わらず、作業に関わる時間はやはり同じようにかかってしまう。もちろん大幅にマシンの演算時間は短縮されたものは少なくないが、それももう天井に近い。

一人のオペレータが複数のパソコンを扱うことができるのは、パソコンの価格が大きく下がったからにはほかならない。DTP の制作の部分では、もっとも大きなコストは人件費であって設備ではない。オペレータの能力を限られた時間の中で精一杯使うとしたら、複数のマシンを使うというアイデアはそれほど突拍子のないことではあるまい。

私などは、オペレーションが忙しい DTP の制作現場では、間違いなく一人で二台のマシンがあったほうが生産性は著しく上がるのではないかと、おもうことしきりである。

一度に二台のマシンを使うとき、できれば二台のマシン回りをすっきりさせた

い。できれば統一の取れないデバイスを積み上げていくより、できるだけ内蔵化していくほうがよい。

新しい筐体の Power Mac は、3.5 インチの機器が一台と、内蔵ハードディスクが二台は増設できる。それで十分というわけではないが、それ以外は USB や FireWire で接続すれば、必要なときだけつなぐことでハードウェアを柔軟にレイアウトすることができる。とくに FireWire はデバイスに電源も供給可能なので、取り回しは簡単だろう。

四隅にハンドルのついた Power Mac 二台と 19 インチから 21 インチ程度のモニタを並べて、デバイスをできるだけ内蔵していけば、スペース的にもそれほど場所を取るわけではないのではないか。

現状では古い Power Macintosh に USB カードをつないだとき、キーボードが英語モードでしか認識しないために、一部入力できないキーがあるが、最初から USB キーボード同士の機種であれば、USB の切り換え器を使って、キーボードを共有することは簡単だ（カナ入力せずローマ字入力すれば、問題ない）。iMac DV のようにミラーリングでも VGA の出力端子を持っていれば、一台は iMac DV でも構わない。

最近のモニタは二系統の入力端子がついていて、前面のボタンで切り換えが簡単にできるようになっているものが少なくないが、もう一押しして、モニタの切り換えと連動した USB の切り換え端子を付けて売るといのはどうだろうか。モニタの切り換えを行なうと、同時に USB の切り換えもするモニタである。

デジタルの夜は明けた .....

USB のハブを付けるより、そっちの方がずっと魅力的なモニタだと思うが、いかがだろうか。

(1999/11/26)





# DTP-S

# ブロード

# キャスト



ブロードキャスト

ニュースリリース

インフォメーションリンク

■Illustratorで作るISBNコード・書籍JANコード

■出雲発のDTPのサイト、「sea-line's page」

■DTPの影を解説する「DTP Class A」

### DTP-Sブロードキャスト 1999年11月26日分

#### ■オンデマンド出版、スウェーデンの事情を聞く

既存の出版社がオンデマンド出版をするだろうか。彼らが気が付いたときは、もう出遅れているのではないか。やはりここは新しい人たちの登場を待つしかないとおもう。それにしても、オンデマンド出版まではまだまだ紆余曲折があるような気がするけどなあ。

#### ◆紹介記事

©ASCII24 1999/11/24

課題残すオンデマンド出版のこれから――オンデマンド印刷を考えるシンポジウムより

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1124/srvc02.html>

#### ■DTPで使えるMac OS 9のレポート その3

菊池美範さんのMac OS 9はDTPで使えるのか、の最終報告です。

QuarkXPressはプレビューの表示でQuickTimeを使っているから、トラブルが発生するわけかな。それ以外は問題がないとしたら、バージョンアップの価値はあるかも。

フォントの上限は、実際には512スーツケースも入らないという話もあるけど、安定性をましたの是有難い。やっぱり実機をMac OS 9にしようかな。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/20

Outside Macintosh and Design : 続・Mac OS 9 はDTPで使えるのか～最終報告

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/20/c\\_outside.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/20/c_outside.html)

#### ■AppleShare IP 6.3のリリース

AppleShare IP 6.3にすると、Power Macクライアント→サーバで最大72Mbpsということとは、1秒間に9MBということになる。これはすげましい。もっとも無料アップデートは30MBもあるらしい。しかしMac OS 9で使うためには、アップデートするしかないぞ。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/18

AppleShare IP日本語版の6.3アップデートは12月上旬公開

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/18/n\\_appleshare.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/18/n_appleshare.html)

#### ◆紹介記事

©日経MAC 1999/11/18

アップル、AppleShare IP新版を発表 出荷は12月中旬に

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/product/9911/asip.shtml>

### DTP-Sブロードキャスト 1999年11月17日分

#### ■InDesign、国内初公開

やっとその一片がお目見えしたInDesignの日本語版だが、ユーザーの期待は、来年の末ではなく、もっと早く出して欲しい、ということだろう。

春までに、β版をバージョンアップ付きで売ってみるっていうのはどうだろうか。β版でも製品版にバージョンアップできるのであれば、買う人はいるとおもうけどね。それでテストもできれば一石二鳥、なんてことはないか。

◆紹介記事

◎ASCII24 1999/11/16

【Seybold Seminars Tokyo/Publishing 99 Vol.4】アドビシステムズがプロフェッショナル用のパブリッシングソフト『Adobe InDesign』を国内初公開

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1116/soft06.html>

---

### ■漢字Talk 7.5.3のフリーソフトになる

やっと日本でもOSの古いバージョンがフリーソフト化しましたね。35MBもあるから、ダウンロードするのはちょっとなあ、と思うけど、フリー化は素晴らしいですね。

◆紹介記事

◎日経MAC 1999/11/15

漢字Talk 7.5.3の無償ダウンロードが可能に

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/hotnews/9911/kt753.shtml>

---

### ■DTPで使えるMac OS 9のレポート その2

菊池美範さんのMac OS 9とDTPで使うレポートの続編です。概ね問題なく、「8.5や8.6よりも安定したDTP環境」になると述べられています。

またMac OS 9とは関係ありませんが、QuarkXPress 3.3JをUSB-ADB変換器のiMateを使って dongle を認識させる方法について記述されています。iMateを使う場合、MicroGuard製のdongleは認識せず、Rainbow製のdongleを使う必要があるそうです。

というわけで、USBしかない機種でも、約一万円程度のiMateを使って、QuarkXPress 3.3Jを使うことは可能ということですが、問題はそれをQuarkがサポートしないということでしょう。プロテクトを外さなくても、積極的にサポートし、トラブルがあっても、責任を果たすように動くべきではないかと思えますね。販売価格からいうと、そのくらいしても、バチはあたらないとおもうけど。

◆紹介記事

◎MacWEEKOnline 1999/11/12

Outside Macintosh and Design : 続・Mac OS 9はDTPで使えるのか ～さらに深く検証

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/12/c\\_outside.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/12/c_outside.html)

---

### ■Windows DTPはどこに行った

ま、ビジネスDTPはプリンタDTPだと思うけどね。フィルム出力のウエイトはそれほどないと思いますね。“Windows VS Macintosh” というような見方は終わったといってもいい。

◆紹介記事

◎ASCII24 1999/11/12

【SEYBOLD Seminars Tokyo/Publishing 99 Vol.2】Windows DTPソフトを辛口評価

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1112/topi06.html>

### ■またで安いキャノンのTrueTypeフォント

キャノンからもMacintoshの日本語TrueTypeフォント75書体して、12,800円のフォンパッケージがリリースされました。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/10

キャノン、TrueTypeフォントパッケージを11月15日より発売

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/10/n\\_fontgallery.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/10/n_fontgallery.html)

## DTP-Sブロードキャスト 1999年11月09日分

### ■機能満載のInDesign日本語版は2000年終盤を予定

InDesignはプロモーションが受けて、アメリカでは受注残をかかえるほど売れているようです。しかし日本語版のリリースは来年の終盤になるというのはちょっと残念。しかし、せっかくだから十分に練りこんでリリースしてもらおうほうがいいかもね。ここに書かれている内容が実現されれば、画期的なソフトになることは間違いないようです。

#### ◆紹介記事

©日経MAC 1999/11/09

“InDesignは、日本語のための開発を行っている” 出荷は2000年終盤を予定

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/hotnews/9911/indesign.shtml>

---

### ■韓国語PostScriptプリンタフォント発売さる

韓国語フォントのPostScriptプリンタフォントです。モニタではTrueTypeを使うようです。1パッケージあたり（24～46書体が収録）1,200dpiまでの中低解像度版が98,000円（税別）、1,200dpi以上の高解像度版が398,000円（税別）だそうです。販売は11月下旬から随時。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/08

「EQハングルフォントライブラリー」のPostScriptプリンタフォント版を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/08/n\\_kankokugo.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/08/n_kankokugo.html)

---

### ■Velocity Engine対応のPhotoshop 5.5のプラグインのバグ

Power Mac G4で期待されているVelocity Engine対応のPhotoshop 5.5のプラグインにバグがあるそうです。この問題はAdobeで対応中で、修正版が出荷されるそうです。またG4ではいまのところMac OS X Serverには対応していないそうです。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/05

G4システムに残る不備

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/05/n\\_g4system.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/05/n_g4system.html)

---

### ■DTPで使えるMac OS 9のレポート その1



---

## DTP-Sブロードキャスト

---

菊池美範さんのMac OS 9がDTPでつかえるのか、というレポートです。Mac OS 9を使うのであれば目を通しておいたほうがいいでしょう。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/05

Outside Macintosh and Design : Mac OS 9はDTPで使えるのか？

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/05/c\\_outside.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/05/c_outside.html)

---

### ■Photoshopにカメラフィルターの効果を与える「Nils' Color Effects!J」

アナログカメラで使用していたフィルターと同様の効果を適用するPhotoshopのプラグインフィルターです。合計で34種類。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/11/01

Adobe Photoshop用プラグイン「Nils' Color Effects!J」を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/01/n\\_nils.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9911/01/n_nils.html)

## DTP-Sブロードキャスト 1999年10月30日分

### ■1900の外字を拡張する「エヌフォー外字DX iEdition」

エヌフォー外字セット300文字、IBM選定外字セット360文字にあわせて使用頻度の高い人名や地名の漢字、そして記号類の文字セットを全1900文字を追加する外字の文字セット。IBM選定外字セットはWindowsと互換性がある。MacOSに付属のTrueTypeフォント（リュウミンライト-KL、中ゴシックBBB）の外字を拡張するもののようです。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/28

TrueType外字フォント「エヌフォー外字DX iEdition」を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/28/n\\_iedition.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/28/n_iedition.html)

---

### ■ColorSync 3.0は特許侵害で訴えられる

主にビデオイメージを複製する技術で特許侵害として訴えられているようです。DTPには直接関係なさそう。しかしDVに力を入れたいAppleにはちよいとツライ訴訟かも。

◆紹介記事

©日経MAC 1999/10/26

米Imatec社、ColorSync 3.0は特許侵害と発表

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/hotnews/9910/imatec.shtml>

---

## DTP-Sブロードキャスト 1999年10月25日分

### ■Adobeのプリフライトソフト、「InProduction」

Adobeのプリフライトツールですが、InDesignを強化するためのもののようです。チェッ

クするだけでなく、フォントを埋め込んだり、色分解にも対応しているとか。ひよっとすると、プリフライト兼PDF経由の分版出力ツールかも知れませんな。

というわけで、InDesign、InCopy、InProduction、そしてネットワーク管理システムのコードネーム「Stilton」がAdobeの次世代のDTPソフトとすることでしょうか。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/23

Adobeがプリフライトツールを準備中

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/23/n\\_adobe.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/23/n_adobe.html)

---

### ■幕張のシーボルトでInDesign見参

来月の幕張シーボルトで、InDesignがお目見えするそうです。出来上がりはどの程度かな。ひよっとすると、発売日も発表されるかも。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/22

アドビ、SEYBOLD TOKYOでスペシャルセッションを実施

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/22/n\\_adobe.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/22/n_adobe.html)

---

### ■「千都フォントライブラリー」CIDになる

大日本スクリーン製造が「ヒラギノ書体」(18書体)「ファンシー書体」(24書体)、かな書体(15書体)を含む「千都フォントライブラリー」を11月11日に発売するそうです。字体の切り換えができる「sfnt」形式のCIDフォントです。ATM版で1書体2万円で、既存のユーザーからのアップグレードは3,000円となっています。価格は、右へならえ、ですな。

◆紹介記事

©日経MAC 1999/10/22

大日本スクリーン製造がマック用CIDフォントをリリース

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/product/9910/dnp.shtml>

---

### ■不法コピー販売で実刑1年

有罪になったのは、前科があったからですな。違法コピーを販売していたのは、もちろんPhotoshopだけではありません。まあでも売上は合計約150万円で、1年の実刑判決は割に合いませんな。

◆紹介記事

©日経MAC 1999/10/22

初の実刑判決、ソフトの海賊版販売で一横浜地裁

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/hotnews/9910/hanzai.shtml>

◆紹介記事

©ASCII24 1999/10/22

海賊版ソフト販売で初の実刑判決——同容疑で埼玉の男性も書類送検

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1022/topi02.html>

### ■Photoshop形式をQuarkXPressで取り込む「Photoshop Import XT」

マルチレイヤー形式のPhotoshopの画像をQuarkXPressに取り込むXTensionです。取り込まれるとTIFFの画像になるようです。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/20

QuarkXPress用XTensions「Photoshop Import XT」を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/20/n\\_inport.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/20/n_inport.html)

## DTP-Sブロードキャスト 1999年10月18日分

### ■アグファの欧文フォントコレクション

合計7,000書体を含むCD-ROMでフォントを供給、1書体4,500円だそうです。フォントをそろそろネットワークから買うようになるかな。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/18

欧文フォントコレクション「Creative Alliance 9.0」を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/18/n\\_creative.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/18/n_creative.html)

---

### ■EGWORDがPDFの書き出しに対応

ワープロソフトにもPDF作成機能がつきました。フォントは埋め込めるのかしらん。

#### ◆紹介記事

©日経MAC 1999/10/18

エルゴソフトがEGWORD新版を発売へ PDF書き出しなどに対応

<http://mac.nikkeibp.co.jp/mac/product/9910/ergo.shtml>

---

### ■Quark、QPSを子会社に売る

QuarkはQuark Publishing Systemを子会社に譲渡するらしい。その意味はなにか。それは不明だそうである。システムインテグレーターに対するアプローチを行なうのに別会社の方が小回りがきいていいのかもね。

#### ◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/15

Paris Calling : QuarkがQPSを手放すわけ

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/15/c\\_paris.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/15/c_paris.html)

---

### ■大日本印刷が売るキーボード操作の監視ソフト

大日本印刷ってこんなこともやってんだね。第三者による社内パソコン使用の監視システムを売るわけよね。日本でどのくらいの需要があるのか知りたいものです。

◆紹介記事

©ASCII24 1999/10/14

大日本印刷、キーボード操作の監視やプログラムの起動制限などを行なうツールを発表

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1014/srvc08.html>

---

■オランダでも話題を呼ぶInDesign

オランダで行なわれた印刷関係の展示会でもInDesignが大きな注目を集めているようです。InDesignとInCopyの二人三脚が話題を呼んでいるようです。「ハイエンドシステムのインテグレーターは自制心のかけらもなくInDesignに群がっている」、なるほどね。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/13

Paris Calling : InDesignのオランダでの評判

[http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/13/c\\_paris.html](http://www.zdnet.co.jp/macwire/9910/13/c_paris.html)

## DTP-Sブロードキャスト 1999年10月12日分

■InDesignを面白くするInCopy

InDesignの変更履歴をテキストベースで編集できるソフトのようですね。うまく使えばバッチ処理にも使えるようです。またプラグインのカスタマイズにも力を発揮するようです。いやいやおもしろくなってきましたね。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/12

AdobeがDTPワークフローソフトInCopyを発表

[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n\\_incopy.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n_incopy.html)

---

■「FILTERiT Ver3.0」を発売は11月5日に

「FILTERiT Ver3.0」の発売が11月5日になるそうです。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/12

Illustrator 8.0用プラグイン「FILTERiT Ver3.0」を発売

[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n\\_filterit.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n_filterit.html)

---

■Photoshop 5.5のライト版あらわる

Photoshop 5.5のライト版ですね。ライト版の要望はけっこう強いものがありましたから、やっと具体化されたようです。もうひとつあったコンシューマ向けのフォトタッチソフトはどうするんだろう。Illustratorもライト版をリリースするかな。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/12

「Adobe Photoshop LE 日本語版」のパッケージ版を発売



[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n\\_photoshop.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/12/n_photoshop.html)

◆紹介記事

©ASCII24 1999/10/12

アドビシステムズ、フォトタッチソフト『Adobe Photoshop』の簡易版を発売

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1012/soft01.html>

---

■フルCTP雑誌“Effects”の裏側

3D雑誌“Effects”の話ではなく、“Effects”がフルCTPで作成されている雑誌であるという内容のインタビューです。やっぱりね、コストは3割ダウンとのこと。大手が本格的にのりだすまでに、まだまだマーケットを広げる価値があるかもしれませんね。雑誌もけっこうデジタルでの入稿が増えてきていて、広告では色校正も確認しないまま印刷することが多いから、けっこうある一線を越えると、一斉に雑誌はCTPになるかもしれません。

◆紹介記事

©ASCII24 1999/10/12

【デジタル・パブリッシング・ウォッチ】Vol.002 CTPをフル活用した新雑誌“Effects”  
——エムディーエヌコーポレーション代表の猪俣裕一氏に訊く

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1012/srv07.html>

---

■Adobe、コンシューマ向け画像ソフトを無料配付

Adobeはデジカメ用のフォトタッチソフト（というよりフォトアルバムソフト）をただで配るようです。取りあえずWindows(R) 95/98/NTのみで、Adobeが一般のコンシューマユーザーの確保するための橋頭堡でしょうか。プロシューマだけでなく、広く製品を売っていかうという決意の現われではないかと思えます。

◆紹介記事

©ASCII24 1999/10/12

アドビシステムズ、初心者向けのデジタル画像処理ソフトを無料提供

<http://www.ascii.co.jp/ascii24/call.cgi?file=issue/1999/1012/soft02.html>

---

■WindowsでのColorSyncは死んだか？

Windowsでのカラーマネージメントはどうなるのでしょうか。はたしてMicrosoftは自社で開発するかな。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/05

Windows用のColorSyncは「なかったこと」に

[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/05/n\\_colorsync.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/05/n_colorsync.html)

---

■銀色をシュミレーションするPhotoshopのプラグイン

銀色のインキを使ったときの感覚をPhotoshop上で再現するためのプラグインのようですね。多分プリンタで出力したときにグレーではなくメタリックな感じてプリントアウトできるといったものでしょうか。出力はDCS2.0を使うようです。

◆紹介記事

©MacWEEKOnline 1999/10/04

恒陽社, 銀色特色版を作成するPhotoshop用プラグインを発売

[http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/04/n\\_magictonesilver.html](http://www.zdnet.co.jp/macweek/9910/04/n_magictonesilver.html)

### ■出版記念キャンペーン案内 (G&Ecorp)

1999年11月29日

#### ●出版記念キャンペーン

「デザイン・印刷知識集 DTP」の出版にあたり、通販会社G&Ecorpでは、記念キャンペーンを執り行なうこととなりました。

URL <http://www.ss.ij4u.or.jp/~gande/campaign11-20-1-20.html>

この機会にぜひご注文を賜りますよう、お願い申し上げます。

キャンペーン期間：1999年11月20日～2000年1月20日まで

#### ●新刊概要

デザイン・DTP・印刷用品メーカーの株式会社ジーイー企画センターは、「デザイン・印刷知識集」のDTP編を出版した。今回のDTP編では現代の標準的なDTP工程における、デザインから印刷の全工程を解説している。写真を多用し初心者に分かりやすい内容に定評がある。新刊に収録した画像類で、読者が実際にDTPマシンで処理を再現できる分について、ジーイー企画センターのWebで無償配布している。

URL <http://www.gek.co.jp/goods/dlb-021.html>

### ■株式会社 コムテックス CTPソリューションセミナーのご案内

「CTP導入のためのワークフローソリューション」

～入力から出力までの高効率運用を実現～

【1999年11月18日付】

株式会社コムテックスでは、CTP導入を前提としたフロントエンドのデジタルワークフロー構築ソリューション「DALiM TWiST」を中心としたセミナーを下記の通り開催致します。本セミナーでは、現在お客様がCTP導入で問題となっているフルデジタルワークフロー構築を始めデジタル校正・検版、在版処理などを弊社のオーケストラシステムを通じて解決していきます。また、大日本スクリーン製造 株式会社、富士写真フィルム 株式会社によるCTPとCTP版材の最近の動向についての講演を行ないます。CTP導入をお考えの方、必見のセミナーとなっております。

#### ◆テーマ：「CTP導入のためのワークフローソリューション」

～入力から出力までの高効率運用を実現～

#### ◆日時：平成11年12月7日(火)

午前の部／10:00～12:35 午後の部／1

4:00～16:35

#### ◆スケジュール

- 10:00～10:45 (14:00～14:45)

「TWiSTによるCTP導入デジタルワークフロー構築」  
株式会社コムテックス

- 10:45～10:55 (14:45～14:55)

休憩

- 10:55～11:40 (14:55～15:40)

「CTP (PTR-8000) の動向」  
大日本スクリーン製造 株式会社

- 11:40～11:50 (15:40～15:50)

休憩

○ 11:50～12:35 (15:50～16:35)

「CTP版材の動向について」

富士写真フィルム 株式会社

- ◆場所 : (株)コムテックス 東京支社 5階 会議室  
東京都新宿区三栄町17-10  
四ッ谷駅 (JR/丸の内線/南北線) より徒歩 5分  
四谷三丁目駅 (丸の内線) より徒歩5分  
曙橋駅 (都営新宿線) より徒歩8分

※弊社所在地図は下記のセミナー申込みサイトに掲載されております。

◆受講料 : 無料 (定員35名)

※会場の都合上、定員になり次第締め切らせて頂きます。

※定員制限のため一社二名様までとさせていただきます。

※午後の部は希望者多数の為、午前の部でお申し込み頂ければ幸いです。

※エンドユーザー様対象のセミナーのため業者の方はご遠慮願います。

◆お申し込み方法

弊社ホームページもしくはEメールでお申し込み下さい。登録完了後、こちらより受講票をお送り致します。

Eメールでお申し込みの方は、次の記載事項を記入してお送り下さい。

希望時間 : 午前の部 / 午後の部

御氏名 (フリガナ) :

貴社名 :

御住所 :

部署 :

御役職 :

電話番号 :

FAX :

E-mail :

【セミナー申込みサイト】 URL : <http://www.comtecs-g.co.jp>

◆セミナーに関するお問い合わせ先

株式会社 コムテックス IT部

TEL : 03-3358-5721

FAX : 03-3358-5722

担当 : 杵淵・工藤・葛原・濱田

E-Mail : [itmail@comtecs-g.co.jp](mailto:itmail@comtecs-g.co.jp)

---

### ■「MathMagic日本語版」デモ版プレゼント!

1999.11.15

株式会社イクイノックス (福岡市中央区天神3丁目10-27) は、希望者にQuarkXPress上で高品位な日本語数式組版が実現する「MathMagic日本語版」のデモ版を配布することを発表しました。



## ニュースリリース

「MathMagic日本語版」は従来MacintoshのDTPでは不可能だった、数学等の教科書等に必要で細かな組版が出来るXTensionで、同社によれば2001年の教科書全面改訂に向けて、既に導入を決定している教科書会社があると言う。

このデモ版では、製品版と同じ内容のハイエンドな日本語数式組版が15日間体験できる為、Macintosh用の数式組版ソフトの導入を検討されている場合には最適。

「MathMagic日本語版」の詳細及びデモ版の請求はイクイノックスのホームページ ([http://www.equinox.co.jp/question/question\\_h.html](http://www.equinox.co.jp/question/question_h.html)) 又はFAX (092-762-3361) で申込むことができる。

上記デモ版に関する問い合わせは下記まで  
株式会社イクイノックス 秋本  
電話092-762-3360  
FAX092-762-3361

### ■イクイノックス「EQハングルフォントライブラリー」に、PostScriptプリンタフォント版を発表

1999.11.8

株式会社イクイノックス（福岡市中央区天神3丁目10-27）は、日本で最大の韓国語フォントコレクションである「EQハングルフォントライブラリー」に、PostScriptプリンタフォント版を11月下旬より順次リリースすることを発表した。

「EQハングルフォントライブラリー」は日本で最大の韓国語フォントのコレクションで、韓国の著名フォントメーカーのフォントを網羅している。現在TrueType版の6パッケージが販売されている。

今回発表されたのは、このTrueType版の各パッケージに対応する、PostScriptプリンタフォント版パッケージ。ただし、「Vol.6 ハーニャンフォントセット」のみ、収録書体の関係で2つに分れる為、7パッケージとなる。各々、中低解像度版、高解像度版がある。

中低解像度版は1200dpi以下のプリンター1台に、高解像度版は1201dpi以上のRIP1台にインストールして使用することが出来る。

価格はそれぞれ中低解像度版が98,000円（税別）、高解像度版が398,000円（税別）で、表示用として、TrueType版パッケージがバンドルされる。

最初に発売されるのは、「Vol.6 ハーニャンフォントセット」に対応する、「Vol.6-A ハーニャンフォントセット(ベーシック24)」と、「Vol.6-B ハーニャンフォントセット(エキストラ46)」の2パッケージ。

「Vol.6-A ハーニャンフォントセット(ベーシック24)」には、明朝体、ゴシック体などの基本となる本文系書体が24書体収録されている。「Vol.6-B ハーニャンフォントセット(エキストラ46)」には見出し用や、新しいフォント46書体が収録されている。

---

## ニュースリリース

---

上記製品に関する問い合わせは下記まで  
株式会社イクイノックス 秋本  
電話092-762-3360  
FAX092-762-3361  
<http://www.equinox.co.jp>

---

### ■イクイノックス「MathMagic日本語版」、英語版よりのトレードアップを発表。

1999.10.29

株式会社イクイノックス（福岡市中央区天神3丁目10-27）は、「MathMagic」の英語版から「MathMagic日本語」へのトレードアップを一律8,400円（税込）で行うことを発表した。

同社では11月5日にハイエンド日本語数式組版XTension「MathMagic日本語」Ver.2.0が発売されるのに先立ち、これ以前に開発元であるInfoLogic.Inc社から英語版の「MathMagic」を購入されたユーザーに対し、日本語版へのトレードアップサービスを行うと言う。

対象となるのは「MathMagic」Ver.1.0から1.6までのユーザー。

申込み方法は、同社ホームページ(<http://www.equinox.co.jp>)より、申込書をプリントアウトし、英語版のインストーラディスクを添えて、同社まで郵送する。トレードアップ料（税込8,400円）は銀行振込、又は郵便書留が利用できる。トレードアップ料金が同社に届きしだい、同社より「MathMagic日本語」のフルパッケージが送られる。

今回発売される「MathMagic日本語」Ver.2.0は、従来のバージョンとは違い、2バイトフォントをサポートしている上、日本語数式組版に対応するため、大幅に機能アップが図られているほか、日本特有のフォント等もバンドルされている。

上記製品に関する問い合わせは下記まで  
株式会社イクイノックス 秋本  
電話092-762-3360  
FAX092-762-3361

---

### ■イクイノックス、同社ホームページで「MathMagic日本語版」通販開始

1999.10.25

株式会社イクイノックス（福岡市中央区天神3丁目10-27）は、初の本格的日本語数式組版ソフトとして注目されている「MathMagic日本語版」の11月5日発売に際し、同社のホームページ（<http://www.equinox.co.jp>）で同製品の通販を開始すると発表した。

同社の通販ページでは、「MathMagic日本語版」や、同社の主力製品である韓国語フォントライブラリーの他に、なかなか手に入らない韓国語キーボードや、QuarkXPress 4.0K等の韓国版DTPアプリケーションもラインナップしている。

また、同通販開始を記念して12月20日までに、韓国語フォントライブラリーを2本購入すると、Apple製韓国語キーボードがもれなくプレゼントされる。

## ニュースリリース

商品の到着には同社製品で2～3日、並行輸入品は1週間前後かかるという。また、支払方法は、銀行振込の他、代引も利用できるということだ。

上記製品に関する問い合わせは下記まで

株式会社イクイノックス 秋本

電話092-762-3360

FAX092-852-1261

### ■Illustratorで作るISBNコード・書籍JANコード

バーコードを自分でつくれるプラグインソフトです。AdobeIllustratorから出版社コード、ISBNコード、分類コード、定価を入力するだけで簡単に規格にあった書籍JANコードとISBNコードがアウトラインデータで生成できます。OCR-Bフォントをインストールする必要はありません。面倒なレイアウトもパターンを指定するだけです。書籍の流通に使用され始めたマイクロQRコードにも対応。

#### ◆Webページ

©ISBNコード・書籍JANコード作成 B. B. D

<http://www.rolan.co.jp/shouhin/shouhin.html>

---

### ■出雲発のDTPのサイト、「sea-line's page」

DTPについては、内容は薄いです。m(\_ \_)mインターネットもメールも慣れてくるにしたがって、つつい忘れそうになりませんか？

冷たい機械の向こうには常に温かい人がいるということに……。

たまにはDTP以外の話題もいいでしょ？箸置みたいなHP（別になくてもいいけど、あればあったで便利かな？）を目指しています。( ^\_^;)

#### ◆Webページ

©sea-line's page

<http://fish.miracle.ne.jp/sea-line/>

---

### ■DTPの影を解説する「DTP Class A」

DTP以前の姿を解説します。DTPの影に隠れてしまった『決まりごと』をより深く理解して下さい。樹海シリーズと題し、組版や色調、PostScriptを深く解説していきます。

DTPが普通になってしまった現在、忘れ去られようとしている、『決まりごと』を、樹海の中から紹介していきます。知りたかった何かを発見して下さい。

#### ◆Webページ

©DTP Class A

<http://www.parkcity.ne.jp/~kondou/index.html>

■月刊PDFマガジン「デジタル ビヘイビア」に掲載されている記事を無断で転載しないでください。またインターネット、イントラネットを問わず、不特定多数がアクセスし、ダウンロードできる環境におかないでください。

■月刊PDFマガジン「デジタル ビヘイビア」に書かれている記事は、著者の個人的な経験にもとづく場合や、使用する機器やOSの環境によって、期待される結果を得られないこともあります。またそれによってハードウェアやソフトウェアに破損が生じたり、制作物や制作時間に問題が起こっても「デジタル ビヘイビア」では一切責任を負いません。

■月刊PDFマガジン「デジタル ビヘイビア」は、上高地仁が主催するWebサイト「DTP-S」を中心にアップされた原稿をPDF化して配付するマガジンです。なお、「DTP-S倶楽部」の会員の方に対してのみ、本号のバックナンバーをダウンロードできるものとします。また「DTP-S倶楽部」の会員向けのだけの記事もあります。「DTP-S倶楽部」のご入会は下記のページからお申込みください。



DTP-SのURLは

<http://www.incunabula.co.jp/dtp-s/>

「DTP-S倶楽部」のご入会は

[http://www.incunabula.co.jp/s\\_club/](http://www.incunabula.co.jp/s_club/)

Eメールでのお問い合わせは

[incun@incunabula.co.jp](mailto:incun@incunabula.co.jp)

---

---

**月刊PDFマガジン  
デジタル ビヘイビア 創刊準備号 99/10-11**

---

---

発行 有限会社 インクナブラ

発行日 平成11年12月18日

編集（文責） 上高地仁

連絡先 〒540-0025 大阪市中央区徳井町2-2-11 LM東本町第三-405

TEL06-6966-4468 FAX06-6966-4469



